

## 訓点資料語彙の電子データ提供に向けての実践的試みⅡ

### ―高山寺蔵『蘇磨呼童子請問経』巻上保延三年点仮名点箇所訓読文用例集―

大久保綾子

#### 本文凡例

一、本用例集は、高山寺蔵『蘇磨呼童子請問経』巻上（保延三年点）の本文を底本として、その仮名加点点箇所の本文及び検索用語を出現順に列挙したものである。

一、底本には朱筆と墨筆による二種類の加点点が確認されるが、訓読文では前者（朱点）には何も付さず、後者（墨筆点）には「」を付すことで両者を区別して示した。

一、用例を掲出する際には、仮名加点点の存する箇所を中心に、一文単位で掲げることが基本とした。但し、文章が長文となる場合等一部用例においては、一つの文章を分割して掲げたものもある。

一、不体裁ながら、検索の便宜上、用例の改行後に行頭の空白を置かなかった。

一、訓読文は底本のヲコト点を平仮名で示し、仮名は底本同

様片仮名で示し、私に補読した語句は平仮名を（ ）に包んで示した。不読の漢字は「」で包んで示し、再読字の二度目の読みも、「當に…」「當」「再讀」「し」のように「」に包み（再讀）と併記した。

一、底本の符号も、合符は訓読文に生かして示した。

その他、音読符・訓読符についてはそれぞれ（音）（訓）の文字を、声点については（平）（平輕）（上）（去）（入輕）（入）などの文字を当該漢字の右下に注記した。また返点は、（返）（一）（二）（三）といった注記により同じく当該漢字右下に示した。

一、底本の二行割注は、訓読文では一行流しとし、その前後をへ～に包むと共に改行箇所については冒頭にくる文字に／を付して示した。

一、句読点は、底本に従って、右下「・」を句点「。」で表し、中下「・」を読点「、」で表した。句読を記すべき所に句読点のない箇所は空白として表し、私に補うことをしない。

一、漢字の字体は活字正字体に従うことを原則とした。

一、所謂、誤字・宛字については底本のままに翻字したが、場合によっては私見を注記した箇所もある。

一、片仮名の字体は現行の字体に改めた。

一、漢字の送り仮名に仮名点とヲコト点が併記されている場合には、「如法に」のように、墨点を朱点のルビとして表現した。また、一つの漢字の読み仮名に二つ以上の仮名点・ヲコト点が付されている場合には、「シ錫ニヤク」のように「朱点〔墨点〕」という形で示した。

一、外字の表示に際しては、当該漢字が存在する箇所に「日十木」のように示した。

一、虫損・破損により本文の字句が欠落した箇所、及び文字は確認できるものの判読できなかった箇所は□によって示した。その場合の検索用語は、残存の情報からの推測により語彙を特定し掲出したものもある。

一、用例の所在、検索用語等の情報は、用例毎に文末に（ ）に包んで示した。またその際には（巻（上下）用例の所在行

数、検索用語）の順に掲げ、所在行数に関しては当該用例冒頭にあたる漢字の所在行を基準とした。

一、補読箇所の表記について

私に補読した語句の表記は、左の各項に従った。

（１）仮名遣は、原則として、歴史的仮名遣による。

（２）活用語尾の補読は、原則として、音便にならないものと活用形によった。但し、一定の四段活用動詞の連用形が「テ」に続く等、音便形として使用された可能性が高い用例の場合には、「シタカ従テ」の如く、当該部分の活用語尾を補うことはしない。

また、活用しない語や活用語でも語幹などに音便を含む語のうち、当時既に音便の形が定着していたと思われる以下の語は、音便の形を以て基準とした。

於オイテ 以モツテ （補読では「ツ」は表記しない。）

（３）補読には濁点は一切加えない。

一、検索用語について

各用例毎に検索用語を決定する作業においては、左の各項に従った。

（１）検索用語は、電子テキストとしての検索の便を考えて、和語は平仮名で、字音語または字音語に準ずるものは片仮名で語形を掲げた。

（２）語の掲出は単語単位を基本とする。

○唯（た）願（はく）「ハ」尊者・成就（返）（せ）＊不<sup>サ</sup>「レ」

因縁を分別し解「―」説「シタマヘ」(上06、・は・ず・・・  
す・(・ゲセチす・)・たまふ・)

\*「不」 左傍仮名は底本のまま。

○尊者の威徳・日の光(の)盛「ル」(か)如(く)して演(返)  
(へ)「タマフ」所の眞言「ハ」・能く諸の闇(返)を破し復(た)  
能(く)衛護して及(ひ)諸の罪を滅「ス」。(上07、・さかる  
・たまふ・は・・・す・(・メツす・))

○云\*何か因(返)を修「シナカラ」復(た)果を獲不「ル」。  
(上08、・・・す・(・シユす・)・ながら・を・う・ず・)

\*「云」 「方」字を重書にて訂す(墨筆)。

○所求の眞言の上中下品の種種の悉地を假―使(ひ)具に修ス  
レトモ亦(た)成就(せ)不。(上10、・・・す・(・シユす・)  
・ども・)

○若―\*以シ「イ、若(し)以「ニ」法(返)に依(り)て「イ、  
依「レトモ」成就(返)(せ)不ラム者「イ、不「レハ」「者」」  
「イ、不者」便「チ」眞言(返)を棄「テ」て「而」无明に順  
「ヒナム」。(上11、・もし・すでに・よる・ども・む・ず・ば  
・ず・すなはち・すつ・したがふ・なむ・)

\*「以」 左傍に「已借音也」(墨筆)とあり。

○\*癡(返)を以(て)惠(返)を覆フレハ療治「ス」可(か  
ら)不「ト」。(上12、・おほふ・ば・レウ・す・(・レウヂす  
・)・ず・と・)

\*「癡」 左傍に「フ」(墨筆)とあるが、未詳。

○若(し)眞言・成就(返)(すること)獲不「ト」説(き)  
「タマハ、」亦(た)惠(返)を覆(ひ)て治(返)(す)可(き)

者无き(か)如し。(上13、・う・ず・と・たまふ・ば・)

○唯(た)願(はく)「ハ」尊者・大悲(返)を以(て)の故に  
眞言(返)「ヲ」敷演して衆生を救脱し(た)「マヘ」。(上13、  
・は・を・たまふ・)

○彼若(は)念誦し\*兼ては護―\*吽摩(返)を作「サムト」  
(上14、・なす・む・と・)

\*「兼」 「惡」字を重書にて訂す(墨筆)。

\*「吽」 「呼」字を重書にて訂す(墨筆)。

○云\*何「カ」明主の・成就を與「へ」不「ラム」。(上15、  
いかに・か・あたふ・ず・む・)

\*「何」 右傍に「□カ」(墨筆)とあり。

○法「ノ」・具(返)(せ)不「ルナリトヤ」爲「ム」(上15、  
・の・ず・なり・とや・す・む・)

○力(返)「ノ」无(きなり)「トヤ」爲「ム」耶。(上16、  
・の・とや・す・む・)

○時節に由(るなり)「トヤ」爲「ム」。(上16、・とや・す・  
む・)

○罪(返)「ノ」有(るなり)「トヤ」爲「ム」耶。(上16、  
・の・とや・す・む・)

○眞言に加―減(返)有(るなりとや)爲「ム」耶。(上16、  
す・む・)

○供養法の・具足(返)(せ)不(るなり)「トヤ」爲「ム」  
耶。(上17、・とや・す・む・)

○願(はく)「ハ」衆生(返)の爲に分別「シ」解説(したまふ)  
「ヘシ」。(上17、・は・・・す・(・ブンベチす・)・べし・)

○時(に) 執金剛菩薩大藥\*又將・當に妙\*膊<sup>ハタ</sup>の是(返)(の)如(き)問(返)(を)聞「キ」已(りて)須<sup>ス</sup>―與目(返)「ヲ」閉(し)「て」「而」思惟(す)。(上18、・ハク・(・メウハク・)・きく・を・)

\*「又」 「又」字を重書にて訂す(墨筆)。

\*「膊」 右傍に「普各反」(墨筆)とあり。

○即(ち)手(返)を轉<sup>「メクラ」</sup>(して)妙拔折羅(返)(を)執(り)「イ、手執」返「ヲ」轉<sup>「メクラ」</sup>「シテ」妙拔折羅」悦<sup>「ハレ」</sup>―目「ヲモテ」告―視「シテ」・是(返)(の)如(き)言(返)(を)作(さま)「く」(上19、・を・めぐらす・て・を・もて・す・(・コクジす・))

○奇<sup>カ</sup>シキ哉<sup>ナ</sup>(上20、・あやし・かな・)

○諸の衆生の類(返)を愍念「スレトモ」由<sup>ナホ</sup>シ月の光の普く世間を照(す)か如(く)して「イ、如「シ」」。(上20、・す・(・ミンネムす・)・ども・なほ・し・ごとし・)

○汝か此の心を「イ、心「ハ」」極て清淨(返)(なる)「ニ」縁(る)「カ」\*放<sup>「ハナツ」</sup>に・已<sup>「ヤメ」</sup>「ニ」一切の諸の大菩薩に超<sup>「ハス」</sup>エ。(上21、・は・に・が・すでに・こゆ・)

\*「放」 『大藏經』では「故」字とする。

○菩提薩埵は己か\*藥「ヲ」求<sup>「モトメ」</sup>(め)不<sup>「フ」</sup>。(上22、・を・)

\*「藥」 『大藏經』では「樂」字とする。

○有情(返)「ヲ」利(せむ)か故に・能(く)大苦を忍(ふ)。(上22、・を・)

○是「ノ」故(に)菩薩「ハ」・衆生の苦(返)を見て\*菩薩亦(た)苦して「イ、苦「ス」」・衆生の樂(返)を見て菩薩亦(た)

樂「ス」。(上23、・この・は・す・(・クす・)・す・(・ラクす・))

\*「菩」 本行では「薩」字の下に記したものを、転倒符で訂す(墨筆)。

○汝か心「ノ」・終「ニ」己<sup>「カ」</sup>か<sup>「レ」</sup>爲<sup>「タメ」</sup>「ニセ」不<sup>「ス」</sup>「して」。

衆生(返)を利(せむ)か故(に)是(返)(の)如(き)問を發「スト」。(上24、・の・つひに・をのれ・(・おのれ・)・が・ため・に・す・す・おこす・と・)

○是「ノ」故「ニ」須臾心(返)を一(に)して思惟(せよ)。(上25、・この・に・)

○吾當「ニ」汝(返)「カ」爲に妙眞言の法を分別して「イ、分別「シ」」解説(せむ)。(上25、・まさに・が・す・(・ブンベチす・))

○\*若(し)我か眞言(の)法(返)「ヲ」持誦(すること)有(る)モ應(に)是(の)如(く)作(す)「應」(再讀)(し)。(上26、・を・も・)

\*「若」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「一」(共に朱筆)とあり。

○先(つ)諸佛(返)「ニ」於(て)深く恭敬(返)「ヲ」起「セ」(上27、・に・を・おこす・)

○次「ニ」无上大菩提心「ヲ」發して貪瞋癡憍慢等を遠離「せよ」。(上27、・つぎに・を・)

○復(た)三寶(返)「ニ」於(て)\*兢<sup>「ウヤマ」</sup>フテ「イ、兢<sup>「ツネ」</sup>「ニ」」珍\*重に懷(へ)。(上28、・に・うやまふ・て・つねに・)

\*「兢」 下欄に「凡仍反／戒齊也」(墨筆)とあり。

\*「重」 右傍に仮名(朱筆)があると思われるが、一部虫損により未

詳。「チヨウ」か。

○亦(た)應(に)虔―誠して深く我(返) (を) 恭敬(し) 及―以(ひ) 大金剛部を\* 遵<sup>シタカ</sup>(ひ) 崇ム<sup>アカ</sup>「應」(再讀) 「シ」。

「イ、亦(た)應(に)虔誠(して)深(く)我(を)恭敬(す) 「應」(再讀) (し) 及以(ひ) 大金剛部(を) 遵―崇して」

(上 29、・したがふ・あがむ・べし・)

\*「遵」 右傍に「シロ」(朱筆)とあり。

○亦(た)酒(返) (を) 飲(み) 及以(ひ) 宍<sup>シラ</sup>「ヲ」食<sup>クラ</sup>「ハ」 不。(上 31、・を・くらふ・)

○若(し) 衆生(返) 有(りて) 邪見(返) 「ヲ」行<sup>ハ</sup>「ハ」者<sup>ハ</sup> 身口意(返) 「ヲ」以<sup>テ</sup>「テ」善業(返) 「ヲ」作(すと) 雖(も) 邪見「ヲ」以(て)「ノ」故「ニ」變<sup>ハ</sup>「して」不善(返) (と)

爲(り)「テ」雜染果「ヲ」得。(上 31、・を・おこなふ・ば・ を・もて・を・を・の・に・て・を・)

○譬<sup>イナ</sup>「ハ」田(返) 「ヲ」營ム<sup>イナ</sup>に時節(返) 「ニ」依(り) 作

(す) トモ種子若(し) 焦<sup>コカ</sup>レヌ<sup>レ</sup>ハ終<sup>ハ</sup>「ニ」芽(返) 「ヲ」生 「セ」不(る)「カ」如<sup>シ</sup>「シ」(上 33、・たとへば・を・いとな む・に・とも・こがる・ぬ・ば・つひに・を・す・(・シヤ ウす・)・が・ごとし・)

○愚癡邪見「モ」亦復(た)\* 是(の) 如(し)。(上 34、・も ・)

\*「是」 「ハ」(日+木)「字を重書にて訂す(墨筆)。

○假―使(ひ) 善(返) 「ヲ」行<sup>ハ</sup>「スレトモ」終(に) 果(を) 獲<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>。(上 34、・を・す・(・ギヤウズ・)・ども・)

○是(の) 故「ニ」應當(に) 邪見(返) 「ヲ」遠離(し) 恆

「ニ」正見(返) 「ニ」依(り)「テ」「而」動搖(せ) 不(る)

「應當」(再讀) (し)。(上 35、・に・を・つねに・に・て・)

○當「ニ」須く十善「ノ」法(返) 「ヲ」修行(せ) 者<sup>ハ</sup>甚深微 妙(の)「之」\* 法(を) 増長す「當」(再讀) (し)。(上 35、

・まさに・の・を・ば・)

\*「法」 右傍に「ノ」(墨筆)とあるが、未詳。

○\* 若(し) 天龍阿修羅等及(ひ) 血肉(返) 「ヲ」食(ふ) 諸の鬼等の類(返) 有(り)て世間(返) に遊行して有情(返) を損害して「イ、損害「シ」持誦者(返) 「ヲ」惱して「イ、

「シ」心(返) (を) 令(て)「イ、「令」心「ヲシテ」散亂 (せ)「令」(再讀) (む)。(上 36、・を・す・(・ソングイ

す・)・を・なやます・を・して・)

\*「若」 同字の上に丸印(朱筆)あり。上欄に「五」(朱筆)とあり。

○我か妙眞言(返) 「ヲ」修行(する)者(返) を見「テ」彼等

\* 目<sup>メ</sup>(のつかし) (ら) 恐怖(の)「之」心「ヲ」懷<sup>ハ</sup>「く」。(上 38、 ・を・て・をのづから・(・おのづから・)・を・)

\*「目」 『大藏經』では「自」字とする。

○此の法「ハ」彼(返) 與極(て) 相違「セルカ」\* 故「ニ」 (上 39、・は・す・(・サウヰす・)・が・に・)

\*「故」 本行では以降に「四本云自然恐怖不能侵惱三本云即生恐怖使 念誦人令退并」という文を続け、下欄に「此ハ別ニ付文也」(朱筆)と 注す。

○修行者(返) 「ヲ」惱(し) 退―心セ令―使(む)。(上 41、 ・を・す・(・タイシムす・)・)

○彼等(返) を令(て)「イ、「令」彼等「ヲシテ」損(返) (せ)

令（め）不（らむと）欲（は）者應（に）須（く）此の大三昧  
耶漫荼羅の法に入（る）「應」（再讀）（し）。（上41、・を・し  
て・）

○諸の大聖衆・及―與（ひ）諸の\*天ノ所居の住處なり。（上  
42、・の・）

\*「天」 「矢」字を重書にて訂す（墨筆）。

○亦復（た）須（く）諸の事法（返）を<sup>（二）ク</sup>作「ル」妙慢荼羅  
に入「ル」「須」（再讀）「シ」。（上43、・つくる・いる・べし  
・）

○諸の障（返）を爲「す」者（返）を摧伏して\*調伏セ使―令ム  
ルニ猶<sup>ヨ</sup>ル。（上44、・・・す・（・デウブクす・）・しむ・に・  
よる・）

\*「調」 本行では同字の上に「誦」字があるが、未詳。

○是（の）故に慇懃に法（返）「ノ」如（く）之「ニ」入（れ）。  
（上45、・の・に・）

○亦（た）應（に）須（く）諸「ノ」眞言主の大漫荼羅に入（る）  
「應」（再讀）（し）。（上46、・の・）

○\*譬（は）車乗「ノ」若（し）輪<sup>「マウ」</sup>輞（返）「ヲ」<sup>モヨホ</sup>「門十  
報」（き）「ツレハ」假「」令「ヒ」善く\*<sup>モヨホ</sup>「人十却」セ  
トモ「イ、善（き）」<sup>モヨホ</sup>「人十却」音「去」「ナレトモ」終  
（に）進（返）（む）「コト」能（は）不（る）か如（し）（上  
47、・の・・マウ・（・リンマウ・）・を・つ・ば・たとひ・も  
よほす・ども・なり・ども・こと・）

\*「譬」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「三」（共に朱  
筆）とあり。

\*「<sup>二</sup>人十却」 上欄に「御イ」（墨筆）とあり。

○戒の勝法（返）无（き）モ「イ、无勝法」「モ」亦復（た）是  
（の）如（く）して。縦―使（ひ）勤\*行「スレ（とも）」終  
に増長（せ）<sup>「ス」</sup>不して（上48、・も・も・・・す・（・ゴンギヤ  
ウす・）・ず・）

\*「行」 右傍の墨筆仮名「スレ」、続く文字を抹消した跡あり。

○成就（返）を\*求（め）者又（た）勝―伴を<sup>モテ</sup>須<sup>モテ</sup>半（よ）。（上  
49、・ば・もちゐる・）

\*「求」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「十」（共に朱  
筆）とあり。また、上欄の「十」の右側には「第十一文在下卷聖道分」  
（朱筆）とあり。

○淨潔に端嚴にして族姓の家に生（まれ）法（返）に依（り）  
て勇健（に）して諸根（返）を調伏して「イ、調伏」「シ」愛―  
語して捨ヲ樂ヒ「イ、樂<sup>ラク</sup>ヲ愛語（して）・捨して」大慈悲（返）  
を具「して」能「く」飢渴・及（ひ）諸の苦惱（返）を忍（ひ）  
餘の天（返）に歸して「イ、歸「シ」」并に及（ひ）供養セ<sup>ナ</sup>不。  
（上50、・・・す・（・デウブクす・）・を・ねがふ・ラク・を  
・（・・・す・）・キす・・・す・（・クヤウす・））

○聰明善巧にして常に恩―義（返）を懷<sup>オモ</sup>ヒ三寶の處（返）に於て  
深心に恭敬（す）。（上52、・おもふ・）

○是（返）（の）如（き）德行アテ・莊嚴（返）を具（する）「イ、  
具「ニ」莊嚴「セラム」」者<sup>（モ）</sup>此「ノ」「之」時「返」に於「テ」  
甚「タ」値遇「シ」難「シ」。（上53、・あり・て・つぶさに・  
・・せる・（・シヤウゴムせる・）・む・この・おいて・はな  
はだ・・・す・（・ヂグす・）・かたし・）

○若(し)善根(返)を具して「イ、具「シ」」德行(返)有(る)者<sup>(も)</sup>  
應(に)是(返) (の)如(き)伴を求(む)「應」(再讀) (し)  
(上54、・ーす・(・グす・))

○\*復(た)次(に)行者・若(し)眞言(返)「ヲ」持誦(し)  
速「ニ」成(返) (せむと)欲(は)は「者」「イ、欲(は)者」<sup>(ハ)</sup>  
・應(に)諸佛の曾<sup>ムカシ</sup>所住の處・或<sup>アルイ</sup>於ハ菩薩・緣覺・聲聞の  
所住(の)「之」處に居す「應」(再讀) (し)。(上56、・を・  
すみやかなり・ば・むかし・あるいは・)

\*「復」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「七」(共に朱  
筆)とあり。

○是(返) (の)如(き)住處は「イ、住處「ヲハ」」諸の天龍  
等・常に供養「シ」及<sup>ス</sup>以(ひ)衛<sup>ス</sup>護「スルコトヲ」爲す。  
(上57、・をば・ーす・(・クヤウす・)・ーす・(・エゴ  
す・)・こと・を・なす・)

○是「ノ」故「ニ」・行者身心(返)を淨(く)「して」常に戒  
儀(返)「ヲ」具「セムト」欲「ハ」常「ニ」應(に)是(返)  
(の)如(き)勝處「ニ」居住す「應」(再讀) (し)。(上58、  
・この・に・を・ーす・(・グす・)・む・と・おもふ・ば・  
つねに・に・)○若(し)是(返) (の)如(き)福地(返)「ニ」遇<sup>ア</sup>  
ハ不(れ)「ハ」亦(た)應(に)「於」大河の邊に居止(す)  
「應」(再讀) (し)。或(は)小河(返)に近(き)「ニモ」或  
(は)陂<sup>ヒ</sup>泊<sup>ハク</sup>(入)に住「せよ」「イ、亦(た)應(に)「於」  
大河の邊(に)居止(し)或(は)小河(に)近(き)にも)或  
(は)陂泊(に)住「す」「應」(再讀) (し)。(上59、・に・  
あふ・ば・に・も・ヒハク・(・ヒバク・))

○名花滋「ト」茂「セルニ」「イ、滋「ク」茂「ク」」。及(ひ)  
闡<sup>「火イ」「ネウ」</sup>開(返)を離「レ」其の\*水清く流「レ」充滿「シ」盈  
溢しても諸の水族(の)惡毒虫の无(き)者<sup>(も)</sup>。(上61、・と・  
ーす・(・モす・)・り・に・しげし・しげし・クワイネウ・  
(・エネウ・)・はなる・ながる・ーす・(・シユマンす・))

\*「水」 本行では同字の上の「大」字を抹消符(墨筆)で抹消。

○或(は)山の間の閑靜(なる)「之」處「ノ」・軟草地(返)  
に布(き) 豐<sup>(ゆた)カ</sup>ニ花果(返)「ニ」足レルニ「イ、足(れる)  
「ナラム」(に)」居(し)或(は)山腹<sup>「フク」</sup>及(ひ)巖窟の中「ノ」  
・諸の\*猛畏の毒獸(の)「之」類无(きに)住「せよ」(上  
62、・の・ゆたかなり・に・たる・り・に・なり・む・フク  
・(・センフク・)・の・)

\*「猛」 本行では以降に「足華果或住山腹及巖窟中」という文を続け、  
それら全てを抹消符(墨筆)で抹消。

○是(の)如(き)等の處に「イ、處「ヲ」」皆(な)應(に)墾<sup>ハ</sup>  
リ掘ラム(こと)深(さ)一肘量(に)す「應」(再讀) (し)  
「イ、應(に)墾<sup>「ホ」</sup>「リ」掘<sup>「ホ」</sup>「ル」「應」(再讀)「シ」深(さ)  
一肘量「ニセヨ」」。(上64、・を・はる・ほる・む・ほる・ほ  
る・べし・に・す・)

○所有の荊棘・瓦礫・糠<sup>「カウ」</sup>骨「ト」毛髮は淨<sup>「カウ」</sup>除「せよ」(上  
65、・カウ・(・カウコチ・)・と・)

○\*灰(去)炭<sup>「クシ」</sup>上<sup>「カム」</sup>鹹<sup>「カム」</sup>平<sup>「カム」</sup>・及(ひ)諸の虫の窟<sup>「アチ」</sup>・乃至(し)  
深「平」ク窟ルニ。如シ盡<sup>「ツク」</sup>(返)サ不<sup>「サ」</sup>「イ、盡(さ)不(るか)  
如(く)して」者<sup>「ハ」</sup>應當<sup>「モ」</sup>に之(返)を棄(て)て更(に)餘處を  
求(む)「應當」(再讀) (し)。(上66、・タン・カム・(・ゲム



・)・あな・ふかし・ほる・に・もし・つくす・)

\*「灰」 同字の右肩に斜線(朱筆)があるが、未詳。

○掘<sup>ホレ</sup>ラ(む)「イ、掘ラム」所(の)「之」處には填<sup>ミ</sup>ツルに淨  
キ土を以(せよ)。(上67、・ほれる・ほる・む・みつ・きよし  
・)

○其(の)地(の)上(返) (に)於(て)「イ、」於「其「ノ」  
地「ノ」上「ニ」」精室を建立セヨ。(上68、・その・の・に・  
・す・(・コンリフす・))

○極て須(く)\*堅<sup>ケン</sup>牢に(す)「須」(再讀) (し)。(上68、  
・ケン・なり・(・ケンラウなり・))

\*「堅」 『大藏經』では「堅」字とする。

○上に妙三昧耶に説(返) (く)所の\*如(く)罪(返)を滅セ  
令(めむ)「カ」故に應(に)數<sup>シハ</sup>ハ須(く)入(る)「應」(再讀)  
(し)。(上68、・す・(・メツす・)・が・しばしば・)

\*「如」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「六」(共に朱  
筆)とあり。また、上欄の「六」の左側には「二(如上/下)」(墨筆)  
とあり。

○是(返) (の)如く普く福聚の諸の明主の所居の住處の漫茶  
羅(返)に入(り)已(り)「ナハ」一切「ノ」諸魔・遙に彼の  
人(返)を見て心に恐怖(返)を懷キ各(の)自<sup>オ(の)つか</sup> (ら)馳—  
散(す)。(上71、・ぬ・ば・の・いだく・おのづから・)

○數<sup>シハ</sup>ハ彼の諸の漫茶羅(返)に\*入(るに)由(り)て聖衆  
「ノ」威力・是の人(返)を加護(する)に諸魔彼(返)を見(る)  
に身・金剛の若<sup>コト</sup>「く」して。復(た)住處(返)を見(るに)  
大火聚の如(し)「イ、住處「ハ」大火聚(の)如(く)見(ゆ)」。

(上72、・しばしば・の・ごとし・は・)

\*「入」 補入符にて「彼」字の上に補入(墨筆)。

○竝に皆(な)馳散して能(く)害を爲(さ)不<sup>シ</sup>。(上74、  
じ・)

○世間の所説・及(ひ)出世間の諸の明主の眞言速に成就「ヲ」  
得。(上75、・を・)

○若(し)此の大漫茶羅(返)「ニ」入(ら)不慈悲及(ひ)  
菩提心(返)を具セ不諸佛(返)を敬は不外の餘天(返)を「イ、  
餘天「ニ」」歸して我「カ」法(返)「ヲ」念持「セム」は即(ち)  
自(ら)―害(する)なり。(上76、・に・す・(・グす・)  
・に・わが・を・す・(・ネムズす・)・む・)

○若(し)念誦の人・遍く諸の漫茶羅に入(るを)辨「セ」不  
して中(返)に於て隨(ひ)「テ」一ノ三昧耶(返)を辨「して」  
深心「ニ」恭敬して「イ、恭敬「シ」」亦(た)應當(に)須  
(く)入(る)「應當」(再讀) (し)。(上77、・す・(・ベン  
ず・)・て・の・に・す・(・クキヤウす・))

○譬(は)芽種・地(返)に依(り)て生(返) (すと)雖(も)漑<sup>ソク</sup>  
キ灌<sup>ソク</sup>(返)クニ「イ、漑(去)灌(するに)」勤(むれ)は乃(ち)  
滋<sup>シ</sup>く茂(返) (ることを)得(るに)\*由(るか)如(し)「イ、  
勤(め)「テ」漑(き)灌(くに)由(り)乃(ち)滋<sup>シ</sup>茂「ス  
ルコトヲ」得(るか)如(し)」(上81、・そそく・そそく・に  
・カイ・す・(・カイクワンす・)・て・シ・す・(・シモす  
・)・こと・を・)

\*「由」 同字の左傍に、「ヒ」のような符号(墨筆)あり。右傍には  
「由」字を記す(墨筆)。

○勝法の戒(返)「ニ」依「ルコトモ」亦復(た)是(の)如(し)。(上82、・に・よる・こと・も・)

○慈(返)「ヲ」以(て)溉灌(し)テ善芽(返)「ヲ」令(て)生「セ」「令」(再讀)(む)。(上82、・を・カイ・す・(・カイクワンす・)・て・を・す・(・シヤウす・))

○世尊の所説の別解脱の法・清淨「ノ」尸羅「ヲ」具「ニ」應(に)修行「す」「應」(再讀)(し)。(上82、・の・を・つぶさに・)

○若(し)是(れ)俗の流<sup>トモカラ</sup>ハ但(た)僧の服「ヲ」除(き)て自餘の律儀をは悉(く)皆(な)應(に)行(す)「應」(再讀)(し)。(上83、・ともがら・は・を・)

○是(返)(の)＊如(く)染法(返)「ヲ」遠離して「イ、遠離「シ」善根(返)(を)具足「して」教門(返)「ヲ」敷演して眞言(を)持誦(せよ)(上84、・を・す・(・ヨリす・)・を・)

＊「如」同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅四」(共に朱筆)とあり。

○若(し)疲倦(返)「ヲ」＊生<sup>ナ</sup>「サ」(は)應(に)微妙(の)大乘經典「ヲ」讀(む)「應」(再讀)(し)。(上85、・を・なす・を・)

＊「生」右傍に「ナサ□」(墨筆)とあり。

○復(た)滅罪(返)「ノ」爲「ニ」常「ニ」空＊閉・及(ひ)清淨「ノ」處(返)(に)於(て)「イ、「於」空閑及(ひ)清淨(の)處「ニシテ」或(は)香泥(返)「ヲ」以「シ」或(は)復(た)砂<sup>イサゴ</sup>ヲ即「して」制多「ヲ」造立(せ)「ヨ」。(上86、

・の・に・つねに・の・に・して・を・もてす・いさご・を・を・す・(・ザウリフす・))

＊「閉」『大藏經』では「閑」字とする。

○内に緣起法身(の)「之」偈(を)安(せよ)。或(は)舍利及(ひ)尊像の前にして「イ、内(に)緣起法身(の)「之」偈或(は)舍利「ヲ」安(し)及(ひ)尊像(の)前(にして)」花鬘・焼香・塗香・花燈・幢幡蓋等・及(ひ)妙讃嘆(返)「ヲ」以「て」虔<sup>ケン</sup>心「ニ」供養(せ)「ヨ」。(上87、・を・を・ケン・なり・(・ゲンシムなり・)・す・(・クヤウす・))

○＊常(に)他(返)「ノ」＊爲(に)祭<sup>マツ</sup>「ルヘシ」。(上90、・の・まつる・べし・)

＊「常」同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「十三」(朱筆)とあり。また、上欄の「十三」の左側には「五(常爲／下)」(墨筆)とあり。

＊「爲」右傍に「ルヘシ」(墨筆)とあるが不審。「祭」字仮名を誤記したか。

○復(た)應(に)火「訓」(返)「ニ」事(へ)「マツリ」及＊以(ひ)王(に)事<sup>ツカ</sup>「フ」「應」(再讀)(し)「イ、事(へ)「マツルヘシ」」。(上90、・に・まつる・つかふ・まつる・べし・)

＊「以」下欄に「女」らしき文字を記す(墨筆)が、本文との対応関係は未詳。

○亦(た)須(く)妻<sup>メ</sup>(返)ヲ娶<sup>ト</sup>リ男(返)「ヲ」生「マシメ」種「ヲ」繼<sup>ツ</sup>「ク」「須」(再讀)(し)。(上91、・め・を・とる

・を・うむ・しむ・を・つぐ・)

○汝此「ノ」法(返)「ヲ」行「して」方に解脱「ヲ」得。(上91、・この・を・を・)

○云何か釋教の眞言「ヲ」持誦(せむ)。(上92、・を・)

○行者若(し)是(れ)・刹利(の)・族種(な)ラハ彼此の難を致サム。(上92、・なり・ば・いたす・む・)

○汝「ハ」是「レ」・族姓刹利(の)「之」種なり。(上93、・は・これ・)

○應(に)須(く)祭―祀シ捨施「シ」自學ス「須」(再讀(し))。(上93、・・・・・す・(・ジガクす・)・・・・す・(・シヤセす・)・・・・す・(・ジガクす・))

○斯(返)(の)如(き)三法は是「レ」汝か本宗なり。(上94、・これ・)

○復(た)須(く)紹(去)繼(去)して「イ、繼ク」・怨敵「ヲ」摧伏す「須」(再讀(し))。(上94、・・・ケイす・(・ゼウケす・)・つぐ・を・)

○汝此「ノ」法(返)「ヲ」行「して」方に解脱「ヲ」得(む)。(上94、・この・を・を・)

○行者若(し)是れ毘舍(の)「之」種「ナラハ」彼此「ノ」難「ヲ」致(さむ)。(上95、・なり・ば・この・を・)

○應(に)農田「シ」・及(ひ)雜「一」産「シ」・興―易等<sup>ツメト</sup>の\*務(を)「イ、務「ヲ」作す「應」(再讀(し)) (上96、・・・・・す・(・ノウデンす・)・・・・・す・(・ゾフセンす・)・・・ヤク・(・コウヤク・)・つめと・いそぎ・を・)

\*「務」 「ツメト」の仮名は原本(高野山本)のまま。

○汝終に合(に)眞言を持誦「す」<sup>合</sup>「合」(再讀(から)不<sup>+</sup>。(上97、・べし・)

○行者若(し)是(れ)・首―陀(の)「之」種ナラハ彼此「ノ」難「ヲ」致(さむ)。(上97、・なり・ば・この・を・)

○是(返)(の)如(き)「之」法・汝(返)に在(り)て何ソ<sup>アツカ</sup>\*關ラム。(上99、・なんぞ・あづかる・む・)

\*「關」 右傍に「開」(朱筆)とあり。

○是(返)(の)如(き)等(の)種々ノ諸の難(返)を以(て)行者(返)「ヲ」惱亂して信心「ヲ」退(か)令(む)。(上99、・の・を・を・)

○彼等の外道「ハ」・直タ他(返)「ヲ」損(するのみ)「ニ」非す(上99、・は・ただ・を・に・)

○外道(の)「之」法は午「ノ」時(返)「ヲ」過(き)「テ」食「す」。(上101、・の・を・て・)

○聖道(返)「ヲ」修(する)者は彼(返)與同「セ」不<sup>不</sup>。(上101、・を・・・す・(・ゾウズ・))

○是「ノ」故「ニ」應(に)外道「ノ」家(返)「ニ」往(き)「て」<sup>不</sup>「而」乞食「ヲ」行(ふ)「應」(再讀(から)不<sup>不</sup>。(上102、・この・に・の・に・を・)

○若(し)善惡因果(の)「之」法(返)「ヲ」論(せ)は有\*智「ニマモ」・无智「ニマレ」・婆羅門種「ニマレ」・毘舍「ニマレ」首陀「ニマレ」等(し)「クシテ」差別无(し)。(上103、・を・に・まも・に・まれ・に・まれ・に・まれ・に・まれ・ひとし・して・)

\*「智」 「ニマモ」の仮名は原本(高野山本)のまま。

○良<sup>マコト</sup>ニ世間の妄分別(返)「ニ」由(る)か故「ニ」假に毘舍・及(ひ)婆羅門を立<sup>タツ</sup>「チタリ」。(上<sup>104</sup>、まことに・に・たつ・たり・)

○首随「ナリトモ」・若(し)能(く)善(返)「ヲ」\*修(せ)は當(に)涅槃「ヲ」證(す)「當」(再讀)「し」。「イ、證「して」利利「ナリトモ」・罪(返)「ヲ」造(ら)は惡道「ヲ」免(れ)不。(上<sup>105</sup>、なり・とも・を・を・なり・とも・を・を・)

\*「修」 返り点らしき点(墨筆)があるが、未詳。

○\*復(た)次「ニ」衆生「ハ」无―始ヨリ已來<sup>コノ</sup>タ垢穢(の)「之」身なり(上<sup>106</sup>、つぎに・は・より・このかた・)

\*「復」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「十四」(共に朱筆)とあり。

○食「ノ」淨(返) (なる)に由(ら)不身心<sup>ウ</sup>(は)淨(なる)を<sup>106</sup>得。(上<sup>106</sup>、の・)

○惡業(返)「ヲ」斷除「シ」諸「ノ」善法(返)「ヲ」修「して」方「ニ」身心(の)清淨(を)獲得(す)可(し)。(上<sup>107</sup>、を・す・ダンヂヨす・の・を・まさに・)

○\*譬(は)人(返)有(り)て身瘡癰<sup>ミ</sup>(平)「イ、癰」を患「ヘテ」但(た)除差<sup>サイ</sup>(返)「イ、差」を念(し)藥<sup>ハタケ</sup>(返)「ヲ」以(て)塗(るか)如(く)「イ、如(し)」「。(上<sup>108</sup>、み・サウセン・シヤウセン・はたけ・うれふ・て

・サイす・ヂヨシヤす・シす・ヂヨシヤす・を・)

\*「譬」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「十六」(共に

朱筆)とあり。また、右傍・上欄の朱筆の「六」字から少しずらして、墨筆にて「七」字を記す。

○寶<sup>アネ</sup>(去)「イ、寶<sup>トク</sup>」「イ、寶<sup>トウ</sup>」「風<sup>カゼ</sup>」「ヲシテ」孔<sup>サ</sup>「一」穴「ヨリ」疎<sup>ス</sup>「キ」「イ、疎<sup>スロカ</sup>」「ニ」漏<sup>モロ</sup>(さ)使(むる)・勿<sup>109</sup>「レ」(上<sup>109</sup>、あな・トク・ヅ・トウ・ヅ・かぜ・を・して・サ・クウグエチ・より・すく・をろかなり・(・おろかなり・)・もらす・なかれ・)

\*「勿」 上欄に「四(勿使/下)」(墨筆)とあり。

○\*其の室に門(返)を安(くこと)東西北方「ニセヨ」。(上<sup>109</sup>、に・す・)

\*「其」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「八」(共に朱筆)とあり。

○營<sup>エイ</sup>(平)「一」造成「リ」已(り)「ナハ」「イ、已(り)」「て」牛糞<sup>エイ</sup>(返)「ヲ」用(て)「於」其の室「ノ」中に塗れ。(上<sup>110</sup>、エイ・ヤウザウ・なる・をはる・ぬ・ば・を・の・)

○彼の法事相應(の)「之」方(返)に隨(ひ)「テ」尊像を安置セヨ。(上<sup>111</sup>、て・す・アンチす・)

○其の所の尊の「一」容<sup>カタチ</sup>・綵<sup>イロ</sup>\*畫<sup>エ</sup>して\*<sup>火ク</sup>II「阜<sup>テウ</sup>十周」剋<sup>コク</sup>して或(は)以て・鑄<sup>アイ</sup>成ヌ。(上<sup>111</sup>、かたち・クワクす・サイグワす・テウコクす・いる・なる・ぬ・)

\*「畫」 朱筆仮名の上に墨筆にて文字らしきものがあるが、未詳。

\*「II」(阜十周) 上欄に「琯/□□反/□也」(墨筆)とあり。

○其の所「一」畫「ノエ」\*槓<sup>コマヤカ</sup>は應(に)白II「疊十毛」の細(く)柔<sup>コマヤカ</sup>ニ密(入)緻<sup>チ</sup>(去)のモノヲ用(ゐ)\*近―\*者織の

成(りて) 兩の\*頭(に) 縷(返) を存す「應」(再讀) (し)

「イ、應(に) 白<sup>ハ</sup>」(疊十毛) 「ノ」 細「一」 柔密「一」 緻(のものを) 用(ある) 「應」(再讀) (し) 近者織(り) 成(し)

「て」 兩(の) 頭「に」 縷「ヲ」 存「ラシメヨ」(上<sup>112</sup>、の・ゑ・こまやかなり・もの・を・の・を・あり・しむ・)

\*「楨」 右傍に「□反」(朱筆)とあり。

\*「近」 『大藏經』では「匠」字とする。右傍に二本線(墨筆)があるが、未詳。

\*「者」 右傍に仮名(朱筆)があると思われるが、虫損により未詳。

\*「頭」 同字から「存」字にかけて右傍に仮名(朱筆)があると思われるが、「ア」の前後の文字は虫損により未詳。

○割\* 截(返) (せ) \*令(むる) 勿(れ) (上<sup>113</sup>、カチセチす・(・カチゼチす・))

\*「截」 右傍に「セ□」(朱筆)とあり。

\*「令」 右傍に仮名(朱筆)があると思われるが、虫損により未詳。

○\*幅(を) 闊<sup>ヒロク</sup>セヨ「イ、闊シテ」\*元<sup>モ</sup>末(た) 曾<sup>モ</sup>ニモ用(返) に經\*「未」(再讀) 「ラムヲセ(よ)」(上<sup>113</sup>、ひろくす・ひろくす・て・もと・むかし・に・も・む・を・す・)

\*「幅」 右傍に仮名(朱筆)があると思われるが、虫損により未詳。

\*「元」 右傍に仮名(朱筆)があると思われるが、虫損により未詳。

\*「未」 右傍に「ラムヲセ□」(墨筆)とあり。

○\*先(つ)・須(く) \*淨「ク」洗(ひ)て・復(た) 香水を「もて」灑(く)「須」(再讀) (し)。(上<sup>114</sup>、きよし・)

\*「先」 「光」字を重書にて訂す(墨筆)。

\*「淨」 補入符にて右傍に補入(墨筆)。

○畫(返) (く) 所(の) 「イ、所畫「ノ」」 綵色には應(に)

膠を和<sup>マシ</sup>フ「應」(再讀) (から) 不<sup>ナ</sup>。(上<sup>114</sup>、の・まじふ・)

○「於」新(し)キ器に牛「ノ」毛「ヲ」置(き)「て」筆(と)爲<sup>セ</sup>「ヨ」。(上<sup>114</sup>、あたらし・の・を・す・)

○其の綵畫の人「ハ」・澡浴清淨に「して」應(に) 八戒(返「ヲ」受(け)て法(返) (の) 如(く) 之(返) 「ヲ」畫(す)

「應」(再讀) (し) 「イ、畫「せよ」」(上<sup>115</sup>、は・を・を・)

○其「ノ」像成「リ」已(り) 「ナハ」應(に) 塗香・燒香・花縵・飲食・燈明を用(て) 讚歎して禮拜して廣く供養「シ」已<sup>ヲ</sup>フ「應」(再讀) (し) (上<sup>116</sup>、その・なる・ぬ・ば・ー・す

・(・クヤウす・)・をふ・)

○然<sup>しか</sup>て後「ニ」・求(返) (め) し所速「ニ」成就を得。(上<sup>117</sup>、に・すみやかなり・)

○\*復(た) 次(に) 行者・若(し) 是(れ) 俗人(な) ラハ亦(た) 頭(返) 「ヲ」剃(り) 「テ」唯(た) 頂<sup>いたた</sup>(の) 髮を留「メヨ」。(上<sup>118</sup>、なり・ば・を・て・いただき・とどむ・)

\*「復」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「十二」(共に朱筆)とあり。

○所着の衣服を赤土に之「ヲ」染「メヨ」。(上<sup>118</sup>、を・そむ・)

○或(は) 白色及一以(ひ) 草衣を着(けし)「メヨ」。(上<sup>119</sup>、しむ・)

○或(は) 樹の皮・芻(去) 摩(上) の布「一」衣(を) 着(けし)メヨ。(上<sup>119</sup>、しむ・)

○或(は) 樹の皮・芻(去) 摩(上) の布「一」衣(を) 着(けし)メヨ。(上<sup>119</sup>、しむ・)

○極て須(く)端圓に・細密「にして」缺(返)「ケタル」无(からし)「メヨ」(上<sup>121</sup>、・かく・たり・しむ・)

○并に破―漏セ不。(上<sup>121</sup>、・―す・(・ハルす・))

○應(に)此の器(返)を持(ち)乞食を巡行(す)「イ、巡行「して」乞食「ス」」「應」(再讀) (し)。(上<sup>121</sup>、・ス―す・(・ジユンギヤウス・)・―す・(・コツジキす・))

○所居(の)「之」處は其「ノ」村(去)邑(返)「ヲ」去(る)「コト」遠(返) (から)不近(から)不。(上<sup>122</sup>、・その・ス―・(・ソンオフ・)・を・こと・)

○衆多の人「ヲ」居して・諸の外道(返)无「く」及(ひ)飲食(返)「ニ」豐に「して」常「ニ」惠施(返) (を)樂「フテ」三寶「ヲ」歸信(せよ)。(上<sup>122</sup>、・を・に・つねに・ねがふ・て・を・)

○然(て)外道「ノ」我慢に(ニ)覆(返) \* 所豪「―」

族(返)「ヲ」倚り恃ムテ「イ、\*倚」「恃」シて」復(た)慈悲(返)无(上)「キヲ」\*破「ス」(上<sup>123</sup>、・の・に・おほふ・おほふ・る・を・よる・たのむ・て・―す・(・イジす・)・なし・を・―す・(・ハす・))

\*「所」中央に斜線(朱筆)あり。「れ」のヲコト点かとも思われるが、未詳。

\*「倚」「倚」字と「恃」字の間の合符に、合点らしき符号(墨筆)あり。

\*「破」同字、翻刻文に反映した以外にも訓読符(墨筆)と「の」のヲコト点(朱筆)があり。更に、右下には墨筆にて「彼」字を記すことから、「彼(訓)の外道」とする読みを想定すべきか。

○或(は)行者の釋「ノ」教の法(返)「ヲ」念誦(する)を(見)已(り)て心「ニ」瞋恚「して」「而」之「ヲ」惱亂す。(上<sup>124</sup>、・の・を・を・に・を・)

○行者若(し)是(れ)・婆羅門(の)種(な)ラハ彼(此)「ノ」難「ヲ」致「サム」。(上<sup>125</sup>、・なり・ば・かれ・この・を・いたす・む・)

○汝應(に)自ラ學(ひ)及―以(ひ)他(返)を教「へ」自(ら)施(受)「ケ」自(ら)天神「ヲ」祭し「イ、天神(を)祭(す)」「應」(再讀) (し)。(上<sup>127</sup>、・みづから・をしふ・ほどこし・うく・を・)

○\*亦(た)妙花「ヲ」亦(た)得ツ。(上<sup>128</sup>、・を・つ・)

\*「亦」同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅五」(共に朱筆)とあり。また、上欄の「卅五」の左側には「七(妙花/下)」(墨筆)とあり。

○爲(返)ハ所ル青蓮・紅蓮花等及(ひ)諸の意樂の種種の雜花なり。(上<sup>128</sup>、・いはゆる・)

○\*行住坐立・通して念誦を許ス。(上<sup>129</sup>、・ゆるす・)

\*「行」同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍に「廿二」(朱筆)とあり。

○唯(た)臥の時「ヲハ」除「く」。(上<sup>130</sup>、・をば・)

○念誦(し)已訖(り)ナハ恆に六念(返)を思(ひ)彼等の種種の功德を觀察セヨ。(上<sup>130</sup>、・ぬ・ば・―す・(・クワンセチす・))

○\*復(た)次(に)貪等の一切「ノ」煩惱・心(返)與相應(する)をは名(け)「テ」生死(と)爲。(上<sup>133</sup>、・の・て

・)

\*「復」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「十五」(共に朱筆)とあり。

○煩惱若(し)心(を)除(かは)「・」清淨「返」「ヲ」得(上133、・を・)

○諸(の)佛「・」彼(返)「ヲ」説(き)「テ」名(け)「テ」解脱(と)爲。(上134、・を・て・て・)

○譬(は)淨水必(す)垢穢无(く)して。塵仝(返)(を)以(て)「ノ」故「ニ」水(返)(を)令(て)「イ、」令「水

「ヲシテ」渾濁(返)(なら)「令」(再讀)(むるか)「イ、渾濁「ナラシムルカ」如(し)(上134、・の・に・を・して・コ

ン・なり・(・ゴンダクなり・)・しむ・が・)○心性「ノ」清淨「ナルコト」(も)亦復(た)是(の)如(し)。

(上135、・の・・・なり・(・シヤウジヤウなり・)・こと・)○客煩惱(返)「ヲ」以(て)心(返)「ニ」渾「メ」「イ、渾

「シ」濁(ら)令(む)。(上136、・を・に・そむ・けがす・)○爲(ハク)縁「―」活(入)兒子・蓮子・路(去)陀(上)羅「上

(二／合)乞「上」沙「上」・(二／合)水精・銅・錫「上」木\*桺(訓)子・瑠璃・金・銀・鐵・貝「なり」・(上137、・いは

く・シヤク・シヤク・ハイ・)

\*「縁」 左傍に二本線(朱筆)を記すが、未詳。  
\*「桺」 右傍に「榎イ」(墨筆)とあり。

○其「ノ」數百(返)に過「セ」ルニ隨(ひ)「テ」一類(返)「ヲ」取(り)「テ」以(て)數珠(と)爲(せ)。(上138、・その・・す・(・クワす・)・り・に・て・を・て・)

○虔心に執持して如法に念誦「セヨ」。(上139、・に・・・す・(・ネムズす・))

○左右「ノ」手「ヲ」以(て)其「ノ」珠(返)「ヲ」執(り)「テ」剋―誦セヨ。(上139、・の・を・その・を・て・・・す・(・コクズす・))

○或(は)右「ノ」手(返)「ヲ」用(あ)或(は)左「ノ」手「ヲモ」\*應(に)用(ある)「應」(再讀)(し)。(上140、・の・を・の・を・も・)

\*「應」 「て」のヲコト点らしき符号(朱筆)があるが、未詳。

○眞言畢(返)(らむと)欲(れは)俱(に)時應\*「爪十

単一ツ」。(上140、・)

\*「爪十卑」 右傍に仮名(朱筆)があると思われるが、虫損により未詳。

○專心に誦持(せ)は謬(り)「テ」錯「―」亂「スルコト」勿(し)。(上141、・あやまる・て・・・す・(・サクランす・)・こと・)

○心を「於」尊「ニ」・或―於(は)眞言「ニ」・及以(ひ)手印に繫(け)ヨ。(上141、・に・に・かく・)

○諸根(返)を調伏して尊「ノ」前(返)(に)端坐して心散亂(せ)不。(上142、・の・)

○微(ナ)シ兩の脣「返」「を」動(し)「て」眞言(を)念持セヨ。(上143、・すこし・・・す・(・ネムズす・))

○此「ノ」心は由シ風「―」電・獼猴「ノ」若シ。(上143、・この・なほ・し・の・の・とし・)

○復(た)海波・\*湖浪の搖(れ)動(く)「カ」如(し)。

(上<sup>144</sup>、・コー・(・グラウ・)・が・)

\*「湖」 左傍に「潮イ依之」(墨筆)とあり。

○詔曲自在にして諸の境「ニ」耽着(す)。(上<sup>144</sup>、・に・)

○是「ノ」故「ニ」應(に)須(く)心(返)を攝(し)「て」散「セ」不<sup>「す」</sup>。(上<sup>144</sup>、・この・に・す・(・サンズ・))

○眞言(返)「ヲ」\*持誦(する)「ニ」若(し)疲倦(返)「ヲ」生「シ」惛\*尤睡眠「し」て心「を」して散亂(返)「せ」令(めは)應(に)起(ち)て經行「す」「應」(再讀)(し)。(上<sup>145</sup>、・を・に・を・す・(・シヤウズ・))

\*「持」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「廿四」(共に朱筆)とあり。

\*「尤」 右傍に「沈イ依之」(墨筆)とあり。左傍に文字(墨筆)があるが、未詳。

○或(は)四方(返)「ヲ」觀或(は)水ヲモテ滲<sup>「アラ」</sup>「ヒ」灑(き)て醒悟(を)得<sup>「エ」</sup>令(めよ)。(上<sup>146</sup>、・を・みる・を・もて・あらふ・う・)

○行者若(し)移動(の)「之」心(返)「ヲ」生「サ」は即(ち)應(に)便(ち)是(返)「の」如(く)對治「ヲ」作(す)「應」(再讀)「シ」。(上<sup>147</sup>、・を・なす・を・べし・)○是の身「ハ」主无(し)。(上<sup>148</sup>、・は・)

○業(返)「ニ」由(り)一切「ノ」諸趣(を)流轉「す」・(上<sup>148</sup>、・に・の・)

○依止「スル」所无(し)。(上<sup>148</sup>、・す・(・エシす・))  
○此「ノ」身(返)「ヲ」捨「て」後「ニ」復(た)餘「ノ」形「ヲ」受(く)。「イ、受「して」」(上<sup>148</sup>、・この・を・に・)

の・を・)

○其「ノ」惡「ノ」「之」業・斯(返)「ニ」因(り)「て」絶(え)不<sup>「す」</sup>。(上<sup>149</sup>、・その・の・に・)

○生老病死・憂悲愁苦・愛別離苦・求不得苦・怨憎會苦・五\*盛蘊苦・所至の方(返)「ニ」隨(ひ)終「ニ」免(るるを)得<sup>「エ」</sup>不<sup>「す」</sup>。(上<sup>149</sup>、・に・つひに・う・)

\*「盛」 「に」のヲコト点らしき符号(朱筆)があるが、未詳。

○蚊<sup>「マウ」</sup>「虫十盲」寒熱・及|以(ひ)飢渴・是(の)\*如(き)等の苦處處に皆(な)有(り)。(上<sup>151</sup>、・マウ・(・モンミヤウ・))

\*「如」 本行では「如」字が重複。

○心<sup>ウツリカタト</sup>轉「返」ラム「ト」欲(れ)は\*方(に)斯(返)「ヲ」以(て)對治(せ)「ヨ」。(上<sup>152</sup>、・うつりかたどる・む・と・を・す・(・タイヂす・))

\*「方」 返り点らしき符号(朱筆)があるが、未詳。

○貪若(し)盛(返)「ら」ム(と)欲(れ)は白骨觀を修セヨ「イ、白骨「返」「ヲ」修「して」觀「ヨ」」。(上<sup>152</sup>、・む・す・(・シユす・)・を・みる・)

○\*「之」行者(の)食(返)「ヲ」喫<sup>「クラ」</sup>ハム(ことも)亦復(た)是(の)如(し)。(上<sup>153</sup>、・を・くらふ・む・)

\*「之」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「十七」(共に朱筆)とあり。また、右傍には朱筆の「七」字から少しずらして、墨筆にて「六」字を記す。

○但(た)飢渴(返)「ヲ」除「せよ」(上<sup>153</sup>、・を・)  
○滋悦<sup>シ</sup>「ヲ」\*樂(は)不「レ」。(上<sup>154</sup>、・シ・(・シエチ



・)・を・ず・)

\*「樂」 右傍に仮名(墨筆)があると思われるが、虫損により未詳。

○譬(は)人(返)有(り)「テ」「於」深「平」\*磧(入輕)(二)(返)ニ\*入(るか)如(し)(上<sup>154</sup>・て・セキ・シムシヤク・)・に・)

\*「磧」 左傍に「尺音」(墨筆)とあり。下欄に「磧(且歴/漱也/水淺□/且□□)」(朱筆)とあり。

\*「入」 「人」字を重書にて訂す(墨筆)。

○飢渴に逼(ら)所て「當」(に)兒の宋(返)(を)食(す)「當」(再讀)(か)「ラム」(上<sup>154</sup>・べし・む・)

○行者(の)食(返)「ヲ」喫(はむことも)亦復(た)是(の)如(し)(上<sup>155</sup>・を・)

○但(た)飢「ノ」病(返)「ヲ」除「せよ」(上<sup>155</sup>・の・を・)

○其「ノ」味「ニ」着(する)勿「レ」。(上<sup>155</sup>・その・に・なかれ・)

○喩(は)物(返)(を)秤クルニ「イ、秤「ノ」物」重「返」(き)「に」隨(ひ)頭(は)下り其「ノ」物若(し)輕(み)「セ」は便「」即(ち)頭高(り)・物若(し)\*均平シケレハ其「ノ」秤亦(た)平(返)シキカ如(し)(上<sup>156</sup>・かく・に・はかり・の・もの・はし・さがる・その・す・あがる・ひとし・ば・その・はかり・ひとし・が・)

\*「均」 〓「土+白」字を重書にて訂す(墨筆)。

○行者(の)食(返)「ヲ」喫ハムコト亦復(た)是(の)如(し)。(上<sup>157</sup>・を・くふ・む・こと・)

○過量「ヲ」得不「レ」。(上<sup>158</sup>・を・ず・)

○應(に)極「テ」少く(ある)「應」(再讀)(から)不。(上<sup>158</sup>・きはめて・)

○譬(は)朽(ち)タル舍・時に崩れ倒(返)レナム(と)欲(れ)は「イ、崩(れ)倒(れなむと)欲(二)時(三)」壞(返)「レ」令(め)不(る)「カ」故「ニ」柱(返)「を」以「て」支へ持ツ「カ」如(く)して「イ、如「シ」」。(上<sup>158</sup>・たり・くづる・たふる・なむ・こわる・が・に・ささふ・たもつ・が・ごとし・)

○行者(の)食(返)「ヲ」喫(はむことも)亦復(た)是(の)如(し)。(上<sup>159</sup>・を・)

○但(た)身「ヲ」存(する)爲(にして)其「ノ」味「ヲ」食(る)勿(れ)。(上<sup>160</sup>・を・その・を・)

○復(た)車の行ラムトシテ當(に)油(返)「ヲ」以(て)塗(る)「カ」如(し)。(上<sup>160</sup>・やる・む・と・す・て・を・が・)

○善(返)「ヲ」増(さむ)「カ」爲(の)故「ニ」應(に)須(く)食「ヲ」喫(ふ)「應」(再讀)(し)。(上<sup>160</sup>・を・が・に・を・)

○是「ノ」故「ニ」世尊斯(返)(の)如(き)法「ヲ」説(く)。(上<sup>161</sup>・この・に・を・)

○行者身(返)(を)觀(するに)猶(ほ)\*芭蕉(の)若シト。「イ、身「ハ」猶(ほ)芭蕉「返」「ノ」若(しと)觀「して」喫(返)(ふ)所「ノ」飲食「ニ」其「ノ」味「ヲ」食(る)勿(れ)。(上<sup>162</sup>・ごとし・とは・の・の・に・その・を・)

\*「芭」 句点らしき符号（朱筆）があるが、不審。下の句点を打ち間違えたか。

○四種「ノ」鉢（返）「ニ」於（て）隨（ひ）て其（の）一（つ）「ヲ」取（れ）。「イ、取（り）」「て」<sup>163</sup>（上）の・に・を・  
○前（の）四肘（返）「ヲ」觀（し）「て」巡行「して」乞食（せよ）。<sup>163</sup>（上）の・を・

○世尊「ノ」所説「なり」。<sup>164</sup>（上）の・

○智恵方便もて六根（返）「ヲ」調伏「して」放逸（せ）令（むる）勿（れ）。<sup>164</sup>（上）の・を・

○女人ノ令<sup>ヨ</sup>キ色「イ、色（返）を令クシテ」巧<sup>タリ</sup>ナル笑<sup>ハ</sup>・嬌<sup>ヒ</sup>レル「イ、嬌ハメル」言<sup>コトハ</sup>・性<sup>ヒトノ</sup>矜<sup>ア</sup>リ莊<sup>カサ</sup>（返）ルヲ愛して行歩<sup>エム</sup>艶<sup>シ</sup>（去）姿<sup>サマ</sup>（平）態男<sup>オサ</sup>の心（返）「ヲ」動（し）「て」迷「―」惑

「シ」醉<sup>スイ</sup>「―」亂（する）コト由<sup>ナホ</sup>シ自性成就の眞言「ノ」如（し）。

<sup>165</sup>（上）の・よし・よくす・て・たくみなり・わらひ・いつはる・り・こばむ・り・ことば・ひととなり・をぐる・（・おぐる・）・かざる・を・エムシ・わざ・を・―・す・（・マイワクす・）・スイ・す・（・スイランす・）・こと・なほ・し・の・

○寧（ろ）\*猛火「返」（返）「ヲ」以（て）燒（き）て鐵の<sup>「チウ」</sup>籌<sup>「サシ」</sup>杖<sup>「フクシ」</sup>「イ、籌杖」<sup>「サシ」</sup>「ヲ」もて捶<sup>クシ</sup>テ雙ツノ目（返）「ヲ」刺<sup>「サシ」</sup>

見（返）（る）所无（から）令（む）トモ亂心（返）「ヲ」以（て）女人ノ種種の相貌美<sup>「ヒ」</sup>（上）艶を觀視「セ」不ラメ。<sup>167</sup>（上）の・を・チウ・（・ヂウヂヤウ・）・ふくし・を・くし・で・ふたつ・の・を・さす・さす・とも・を・の・ビ・（・ミエム・）・―・す・（・クワンジす・）・ず・む・

\*「猛」 本行「猶」字の右傍に「猛」字を記す。

○緣（返）「ニ」隨（ひ）乞食（せよ）。「。」<sup>168</sup>（上）の・に・

○\*草及往\*着。<sup>169</sup>（上）の・

\*「草」 右傍に「ト」（墨筆）とあるが、未詳。「草」字から「着」字にかけて、『大藏經』では「莫生住著」とされており、底本とは大きく異同が見られる。

\*「着」 右傍に「ヲ」（墨筆）とあるが、未詳。

○思惟（返）「ヲ」\*正「して」其「ノ」心（返）「ヲ」調伏し牟<sup>「ム」</sup>尼の行（返）「ヲ」以「て」「而」他舍（に）入「レ」。<sup>169</sup>（上）の・を・その・を・ム・（・ムニ・）・を・いる・

\*「正」 「正」字と「思」字の間に中央の合符（朱筆）があるが、未詳。

○上中下貧賤（の）「之」家「ヲ」擇は不「レ」。<sup>170</sup>（上）の・を・ず・

○又（た）應（に）新（し）く生（を）産（む）處・及（ひ）衆多の人ノ酒（返）（を）飲（む）「之」處（に）入（る）「應」<sup>「再讀」</sup>（から）不。<sup>170</sup>（上）の・

○\*姪男姪女「ノ」・放逸（の）「之」處・衆多の小兒「ノ」・戲劇<sup>「キヤク」</sup>（の）「之」處ニ婚禮<sup>「レ」</sup>「訓」（返）ニ於<sup>「テ」</sup>テスル處惡（し）「キ」狗（返）有（る）處・衆多の人ノ論し聚會セラム「之」處・及以（ひ）戲―兒の音樂（返）「ヲ」作<sup>「コ」</sup>サム處・上（返）（の）如（き）「之」處「ニ」皆（な）應（に）往（く）「應」<sup>「再讀」</sup>（から）不。<sup>171</sup>（上）の・の・ギヤク・（・ケギヤク・）・に・に・において・す・あし・の・―・す・（・ズエす・）・り・む・を・こす・む・に・

\*「姪」 「姪男」の二字、補入符にて下欄に補入（墨筆）。

○食（返） 「ヲ」乞（ひ）―得<sup>エ</sup>已（り）テハ即（ち）本處（返）

「ニ」還（り）「て」水（返）（を）以（て）足「ヲ」洗（え）。

（上<sup>174</sup>、・を・う・て・は・に・を・）

○食（返） 「ヲ」分（ち）「テ」三分「返」（と）爲（せ）。「イ、爲<sup>ヱ</sup>

「シ」」（上<sup>174</sup>、・を・て・なす・）

○一分「ヲハ」本尊「ニ」供養「シ」。\*一分をは無「―」導  
に通し「イ、通「シテ」」。一分「ヲハ」自「ラ」食（せ）「ヨ」。

（上<sup>174</sup>、・をば・に・・・す・（・クヤウす・）・・す・（・ツ  
ウず・）・をば・みづから・・す・（・ジキす・））

\*「―」 175行と176行目の行間に、「四本云施无導 三本云一通无導  
一分ヨ食餘（転倒符（墨筆）あり）者ナリ水陸過去七代父母及餓鬼」（墨  
筆）と記す。

○時（返）（に）依（り）「て」「而」食（せ）「ヨ」。（上<sup>175</sup>、・

・す・（・ジキす・））

○日（に）三（たび）澡浴「セヨ」（上<sup>176</sup>、・・・す・（・サウ  
ヨクす・））

\*「日」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿九」（共に  
朱筆）とあり。

○\*復（た）花・香・塗香（返）を獻（し）・讃嘆（せ）ヨ「イ、  
花香塗香讃嘆「ヲ」獻（せよ）」。（上<sup>176</sup>、・・・す・（・サンタ  
ンす・）・を・）

\*「復」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍に「廿六」（朱筆）とあ  
り。

○三時「ヲ」闕（く）莫（れ）。（上<sup>176</sup>、・を・）

○供養（返）（する）所の食「ハ」應（に）雜穢「ニ」（す）「應」（再讀  
（から）不。（上<sup>176</sup>、・は・・・なり・（・ゾフエなり・））

○\*念誦（の）「之」時「ニハ」應（に）茅草「ニ」坐「す」  
「應」（再讀）（し）。（上<sup>177</sup>、・に・は・に・）

\*「念」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿」（共に朱  
筆）とあり。

○心ノ\*若（く）して・諸の供養（の）物（返）（を）辨（せ）  
不（れは）「イ、若（し）心「ニ」辨「返」「セ」不（る）諸（の）  
供養「ノ」物「ハ」俱（に）\*不―共（返）を奉（り）テ住せ  
（よ）「イ、俱（に）奉（る）も共「ニ」住「セ」不「レ」」。  
（上<sup>177</sup>、・の・に・・す・（・ベンズ・）・の・は・て・ともに  
・・す・（・ヂユウす・）・ず・）

\*「若」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿七」（共に  
朱筆）とあり。

\*「不」 上欄に「九（不共／下）」（墨筆）とあり。

○\*行者若（し）不善「ノ」思惟「セハ」速「ニ」應（に）遠  
\*離（す）「應」（再讀）（し）（上<sup>178</sup>、・の・・・す・（・シユ  
イす・）・ば・すみやかなり・）

\*「行」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍に「卅」（朱筆）、左傍に  
「卅一イ」（朱筆）、上欄に「卅一」（朱筆）とあり。

\*「離」 同字、本行にはなし。「遠」字の下、下欄に墨筆にて記す。

○亦復（た）是（の）如（き）乃至（し）一念の「イ、一念「モ」」  
心「ニ」在（ら）使（むる）勿（れ）。（上<sup>179</sup>、・も・に・）

○譬（は）室内に\*然<sup>トモ</sup>スニ燈燭を\*已（するか）如（く）して  
「イ、如「シ」」。（上<sup>179</sup>、・ともす・に・ごとし・）

\*「然」 『大蔵経』では「燃」字とする。

\*「已」 左傍に「以也」(朱筆)とあり。

○風(返) (を) \*防<sup>「フセ」</sup> (くを) \*爲(す)「カ」故(に) 燈焰<sup>「イヨ」</sup>・轉<sup>「カ」</sup> (よ) 明<sup>「あき」</sup> (なり)。(上<sup>180</sup>、ふせく・が・いよい・あきらかなり・)

\*「防」 補入符にて右傍に補入(墨筆)。

\*「爲」 本行「依也」。二字の上に「爲」字を重ね書き(朱筆)した上で、右傍に「依也」(朱筆)と記す。

○眞言(返) 「ヲ」持誦「して」復(た) 勤勇(返) 「ヲ」加(ふ)レハ善法増長(する) こと\*生住復(た) 是(の) 如(し)。(上<sup>180</sup>、を・を・くはふ・ば・)

\*「生」 「生住」二字、『大蔵経』にはなし。

○\*復(た)次(に)行者・當(に)威儀「ヲ」具(す)「當」〔再讀(し)〕。(上<sup>182</sup>、を・)

\*「復」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅二」(共に朱筆)とあり。

○手(返) 「ヲ」拍(ち)「テ」音樂<sup>「シ」</sup>し哥舞<sup>「上」</sup>し婚<sup>「シ」</sup>(し)

\*博<sup>「ハク」</sup> (入) 戲し及(ひ)往(き)て觀看<sup>「ミ」</sup>ル「イ、觀「―」看(する)」「(を) 得<sup>「エ」</sup>不<sup>「シ」</sup>・(上<sup>182</sup>、を・て・・・す・(・オムガクす・)・・・す・(・カムす・)・ハク・す・(・ハクケす・)・みる・う・じ・)

\*「博」 本行上欄に「祀」(朱筆)とあるが、未詳。

○亦(た)在家出家「ヲ」\*毀謗(せ)不。(上<sup>183</sup>、を・)

\*「毀」 「せ」のヲコト点らしき符号(朱筆)があるが、不審。

○及(ひ) \*慢過慢\*相「―」又\*期「―」剋・及以(ひ) 詔

曲「シ」・非―時の「イ、非時「ニ」睡眠「シ」・无義の「イ、无義「ニ」」談―論して文章及(ひ)諸の邪法(返)「ヲ」尋<sup>「タツ」</sup>「ネ」學「ヒ」瞋恚「シ」・忿恨「シ」・慳貪「シ」嬌慢「シ」放逸「シ」懈怠(する)は皆(な)須(く)遠離(す)「須」〔再讀(し)〕。(上<sup>183</sup>、を・・・す・(・エウコクす・)・に・・・す・(・ズイメンす・)・に・を・たづぬ・まなぶ・・・す・(・シンイす・)・・・す・(・フンゴンす・)・・・す・(・ケントムす・)・・・す・(・ケウメンす・)・・・す・(・ハウイチす・)・)

\*「慢」 本行では同字の下に「婚禮」の二字あり。「婚」字の右傍と左傍には、抹消符かと思われる丸印(墨筆)あり。「禮」字には二本線(朱筆)で抹消した跡あり。

\*「相」 以下「相又期剋」の左傍に、「タカヘシヲシ」(朱筆)「スマヒトリ」(朱筆)という付訓がなされているが、本行の単語との対応関係は未詳。

\*「期」 右傍に「相イ」(墨筆)とあり。

○亦(た)酒(返) (を) 飲(み)及―以(ひ)肉「ヲ」食(は)不。(上<sup>186</sup>、を・)

○\*葱<sup>「ソウ」</sup>(平)蒜<sup>「サン」</sup>(去)「イ、蒜」菹<sup>「ヒ」</sup>(去)「イ、菹」薤<sup>「カク」</sup>(入)「イ、薤」胡<sup>「アヒル」</sup>(平)麻<sup>「マ」</sup>(平)・蘿蔔<sup>「ラフクヒル」</sup>(入)「イ、蘿」蔔<sup>「カス」</sup>及(ひ)野<sup>「アサツキ」</sup>(上)の蒜<sup>「アヒル」</sup>(去)・步<sup>「ホ」</sup>「去」底<sup>「テイ」</sup>「上」那<sup>「アラ、キ」</sup>唐云驢<sup>「ニ」</sup>(平)／駒<sup>「アサツキ」</sup>(平)蹄<sup>「テイ」</sup>(去)胡<sup>「アヒル」</sup>(平)麻<sup>「マ」</sup>(平)油<sup>「アフラ」</sup>\*滓<sup>「カス」</sup>「去」「イ、滓」等竝「ニ」應<sup>「テイ」</sup>(に)食(ふ)「應」〔再讀(し)〕(から)不。(上<sup>186</sup>、ソウ・(・ス・)・サン・ひる・ヒ・(・ク・)・にら・カク・(・ゲ・)・あさつき・あさ・ラフク・(・ラボク・)・あららぎ・ひる・ホテ

イ・・（・ブタイナ・）・・・・・テイ・（・ロクダイ・）・あぶら  
・かす・シン・（・シ・）・ならびに・）

\*「葱」 左上に斜線（朱筆）があるが、未詳。

\*「滓」 左傍に「シ」（朱筆）音（墨筆）」とあり。

○亦（た）一切の殘食「ヲ」喫（ふ）コト得不。（上<sup>188</sup>、・を  
・こと・）

○鬼神（返）を祭（る）食・并「ニ」供養の食・上「ノ」如（き）  
「之」殘食皆（な）應（に）食（ふ）「應」（再讀）（から）不。

（上<sup>188</sup>、・ならびに・の・）

○\*復（た）次（に）行者以て持誦（返）を勤（め）て「イ、  
勤（めて）持誦「して」應（に）晝一夜を度（る）「應」（再讀）  
（し）。（上<sup>189</sup>、・はかる・）

\*「復」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「廿一」（共に  
朱筆）とあり。

○念誦畢已（り）「テハ」應（に）法（返）「ノ」如「ク」發遣  
「ス」「應」（再讀）（し）。（上<sup>190</sup>、・て・は・の・ごとし・  
・す・（・ホツケンす・））

○敷「クニ」茅草（返）「ヲ」以「して」彼（返）「ニ」於（て）  
「而」臥（せよ）。（上<sup>190</sup>、・しく・に・を・に・）

○睡（返）（らむと）欲（る）「之」時「ニ」先（つ）慈悲喜捨  
（の）「之」觀「ヲ」作（せ）。（上<sup>191</sup>、・に・を・）

○并（に）三寶及（ひ）舍利塔（返）「ニ」於（て）深心に恭  
敬「セヨ」。（上<sup>192</sup>、・に・・・・・す・（・クキヤウス・））

○斯（返）「ノ」如（き）「ノ」法（返）「ヲ」以（て）當（に）  
諸「ノ」罪「ヲ」滅「ス」「當」（再讀）（し）。（上<sup>192</sup>、・の・

の・を・の・を・・・す・（・メツす・））

○\*復（た）次（に）行者\*三白食・或（は）菜根・菓・乳・  
酪・\*及（ひ）蘇・大麥・麵・餅・油\*<sup>カス</sup>「六<sup>カス</sup>十口<sup>カス</sup>十手」<sup>カス</sup>「イ、

食・種\*種（の）糜（平）粥を服せよ「イ、三「一」白「一」  
食「ヲ」服「セヨ」或（は）菜根菓乳酪及（ひ）蘇大麥<sup>「ムキノコ」</sup>麵<sup>「ムキノコ」</sup>

餅油<sup>「ムキノコ」</sup>「六<sup>カス</sup>十口<sup>カス</sup>十手」訓 酪 醬 相（ひ）和（すらむ）「之」  
食種種「ノ」糜粥<sup>「ヒ」</sup>」。（上<sup>193</sup>、・かす・シ・シャウ・（・サウ・）

・らむ・を・・・す・（・ブクす・）・むぎのこ・つくりみづ・  
の・ビ・・（・ミシユク・））

\*「復」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「十八」（共に  
朱筆）とあり。

\*「三」 「三白」の二字、補入符にて右傍に補入（墨筆）。

\*「及」 下方に線（朱筆）があるが、未詳。

\*「二」 「六<sup>カス</sup>十口<sup>カス</sup>十手」 上欄に「滓イ」（墨筆）とあり。

\*「種」 補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○若（し）龍鬼藥叉・起一屍の法「一」等（返）（を）成就「セ  
ムト」欲（は）は修羅宮（返）（に）入（れ）「イ、入「一」修  
羅宮「ノ」猛利の成就「す」（上<sup>195</sup>、・の・・・・・す・（・ジャ  
ウジュす・）・む・と・の・）

○應（に）麻（平）滓<sup>サイ</sup>（の）\*和（する）ニ酪の醬（平）を以（せ  
るを）食「す」「應」（再讀）（し）。（上<sup>196</sup>、・・・サイ・（・メシ  
・）・に・）

\*「和」 左傍に仮名（朱筆）があると思われるが、虫損により未詳。

○\*我今當（に）拔折羅法「ヲ」説（く）「當」（再讀）（し）。

(上<sup>198</sup>、・を・)

\*「我」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅六」(共に朱筆)とあり。

○念誦(の)「之」者常(に)應(に)受\*持(する)「應」(再讀(し))。(上<sup>198</sup>)

\*「持」 右傍に「カ」(墨筆)とあるが、未詳。

○量「ノ」長「ハ」八指・\*或(は)十指・或(は)十二指・或(は)十六指「ニセヨ」。(上<sup>199</sup>、・の・は・に・す・)

\*「或」 「或十指」は墨筆にて右傍に補入。

○其「ノ」\*量最極は「イ、最極「ノ」」長「ハ」二十指・(上<sup>199</sup>、・その・の・は・)

\*「量」 補入符にて右傍に補入(墨筆)。

○若(し)大貴・自在(返) (を)成就(し)及(ひ)持明「ノ」悉地(返)「ヲ」求(め)「ムト」欲(は)者即(ち)應(に)

金(返)「ヲ」用「テ」拔折羅「ニ」作(る)「應」(再読(し))。

(上<sup>200</sup>、・の・を・む・と・を・もて・に・)

○瞋「ノ」火若(し)盛「ラハ」慈悲「ノ」觀「ヲ」作「セ」。

(上<sup>201</sup>、・の・さかる・ば・の・を・なす・)

○无明若(し)盛(ら)は緣起「ノ」觀「ヲ」作「セ」。(上<sup>202</sup>、・の・を・なす・)

○有(る)時「ニハ」怨家翻<sup>カヘ</sup>テ親友(返)「ト」爲<sup>ナ</sup>「リ」有(る)時(に)は親友翻して怨家(返)「ト」爲(る)(上<sup>202</sup>、・に・は・かへる・て・と・なる・と・)

○復(た)變して以(て)怨親(と)爲(る)等(の)者復(た)變異の家(返)「ニ」歷して此の親友皆(な)不定の相(返)「な

り」(と)知れ(上<sup>203</sup>、・に・)

○智者(は)應(に)妄<sup>ミタリ</sup>ニ戀\*着(を)起「ス」「應」(再読(から)不。(上<sup>205</sup>、・みだりに・おこす・)

\*「着」 左傍に「十二」(朱筆)とあり。

○\*中間に「イ、中間「ノ」」心「ヲ」(もて)「イ、心「ニ」」親友(返)に往(かむ)「ト」欲「ハム」\*時「ニハ」・斯「ノ」法門(返)「ヲ」\*以「テ」應(に)須(く)對\*治「ス」「應」(再讀(し))。(上<sup>205</sup>、・の・を・に・と・おもふ・む・に・は・この・を・もて・ー・す・(・タイズす・))

\*「中」 左傍に「五」(朱筆)とあり。

\*「時」 左傍に「六」(朱筆)とあり。

\*「以」 左傍に「九」(朱筆)とあり。

\*「治」 左傍に「十」(朱筆)とあり。

○念誦(返) (せむと) \*欲(はむ)時及(ひ)持誦の\*後に

\*常(に)應(に)外道・婆羅門・利利・毘舍・首陀・及―與(ひ)黃(平)門(平)の童男童女等「ニ」(返)與「ニ」共(に)

相(ひ)談「去」論「上」「三」「ス」「應」(再読「四」(から)

不「五」。(上<sup>206</sup>、・あひーす・(・あひダムロンす・))

\*「欲」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「廿三」(共に朱筆)とあり。

\*「後」 左傍に「三」(朱筆)とあり。

\*「常」 左傍に「十三」(朱筆)とあり。

○法事「而」畢已(り)て若(し)語(返) (らむと)欲(はむ)時「ニハ」應(に)伴侶(返) (と)共「ニ」善法「ヲ」論談「す」「應」(再読(し)) (上<sup>208</sup>、・に・は・とも・に・を

・)

○涕<sup>「テイ」</sup>(平) Ⅱ「水<sup>タ</sup>十垂」(平)(返)「ヲ」\*棄(て)已(り)

「テハ」便(ち)應(に)澡(平)灑(去)「す」「應」(再読)  
し。(上<sup>209</sup>、・テイダ・を・て・は・)

\*「棄」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅」(共に朱筆)とあり。

○若(し)便―易(平)已(ら)は竝「ニ」須(く)滲<sup>シム</sup>(平)浴  
「す」「須」(再読<sup>イ</sup>) (し)。(上<sup>209</sup>、・イ・(・ベンイ・)・な  
らびに・シム・す・(・シムヨクす・)

○獻(する)\*所(の)香花・然燈・讚嘆・持戒・精勤・及―  
以(ひ)念誦・所生の功德「ヲハ」・皆(な)應(に)无上菩  
提「ニ」迴向「す」「應」(再読) (し)。(上<sup>210</sup>、・をば・に・)

\*「所」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「廿八」(共に朱筆)とあり。

○譬(は)衆「ノ」流の大海(返)(に)歸趣「す」彼「ノ」  
海(返)「ニ」入(り)已(れ)は便(ち)一味(返)「ト」爲  
(る)「カ」如「シ」。(上<sup>211</sup>、・の・かの・に・と・が・ご  
とし・)

○菩提(返)「ニ」迴向(すること)亦復(た)是(の)如  
(し)。(上<sup>212</sup>、・に・)

○一切\*令集して共「ニ」佛果「ヲ」成「す」。(上<sup>213</sup>、・とも  
に・を・)

\*「令」『大藏經』では「合」字とする。

○譬(は)人(返)有(り)「て」稻穀(返)を耕<sup>タカヘ</sup>シ種(へム)(に)

「イ、耕種「スルニ」唯(た)子―實(返)ヲ求(め)「テ」

藁<sup>カウ</sup>(去)幹<sup>カン</sup>(上)「イ、藁幹」ヲ望(ま)不「。」子―實成熟し

「イ、成熟「して」收<sup>フラカダ</sup>メ獲<sup>カ</sup>リ「イ、獲(入輕)「ヲ」收(め)」

「・」刈<sup>カ</sup>ルコト已(れ)は「イ、已「スレハ」藁<sup>カウ</sup>幹(は)求(返)  
(め)不(して)「而」自然「ニ」得(る)「カ」如「シ」。(上

213、・たがへす・うふ・(・うう・)・む・カウ・す・(・キヤ  
ウシユす・)・に・み・を・て・カウカン・わらから・を・み  
・おさむ・かる・を・かる・こと・すでにす・ば・カウ・  
(・カウカン・)・(・(・ジネンに・)・が・ごとし・)

○是(返)(の)如(き)\*行者菩提(返)(を)獲功德(の)子<sup>タネ</sup>(返)  
ヲ種(ゑむと)「イ、菩提「ノ」種「―」功德「ノ」子(を)  
獲(むと)「欲(はは)世「ノ」樂「ヲ」爲(さ)不「レ」」。(上  
215、・たね・を・の・の・の・を・ず・)

\*「行」 本行では「者」字の下に記したものを、転倒符で訂す(墨筆)。

○无上菩提を以(て)「・」其「ノ」實「ニ」喩(ふ)。(上  
216、・その・に・)

○諸餘「ノ」世の樂をは將に草幹<sup>「」</sup>の求(返)(め)不(る)「ニ」  
自(ら)獲(るに)比「す」。(上<sup>216</sup>、・の・の・に・)

○若(し)復(た)人(返)有(り)「テ」小利(返)「ヲ」求  
(めむ)「カ」爲「ニ」「於」行人(返)「ヲ」請(ふも)應(に)  
彼(返)「カ」爲「ニ」「而」本願(返)「ヲ」退「す」「應」(再讀)

(から)不(上<sup>217</sup>、・て・を・が・に・を・が・に・を・)

○我「カ」長壽(の)「之」身(返)「ヲ」獲得して及(ひ)種  
種の諸餘の資具(返)(を)獲「て」厭<sup>ア</sup>(返)クコト无(き)「イ、  
无「―」厭」心(返)(を)以(て)當(に)衆生(返)「を」  
利(し)所求の種種(の)「之」願「を」満足(せしむ)「當」(再讀)

(きを) \*待「テ」。(上<sup>219</sup>、・わが・を・あく・こと・まつ・)

\*「待」 「持」字を重書にて訂す(墨筆)。

○\*復(た)次(に)世間「ノ」八法「を」遠離せよ。(上<sup>221</sup>、  
・の・)

\*「復」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅三」(共に  
朱筆)とあり。

○爲(返)ハ所ル善稱と・悪名と・及|以(ひ)苦樂と得利と  
失利と毀謗と讃譽なり。(上<sup>221</sup>、・いはゆる・)

○此の世の八法を當「ニ」遠離(す)應(し)。(上<sup>222</sup>、・まさ  
に・)

○能(く)一切の不善「ノ」法(返)「ヲ」生(するか)故(に)。  
(上<sup>222</sup>、・の・を・)

○譬(は)大海の如(く)死屍(返)(を)宿ラ不して及(ひ)  
刹那に終(つ)ニ「イ、終リニ」「イ、大海(の)死屍「ヲ」宿(し)  
及(ひ)刹那(に)終(上)「(へ)不「中」(る)「カ」如「下  
(し)」(上<sup>223</sup>、・やどる・つひに・をはり・に・を・が・)

○\*折\*羅「而」念誦(返)「ヲ」作(さ)は終「ニ」一切の  
法事「ヲ」成就(せ)不「イ、不」。(上<sup>223</sup>、・を・つひに・  
を・)

\*「折」 本行では「羅」字の下に記したものを、転倒符で訂す(朱筆)。

\*「羅」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅八」(共に  
朱筆)とあり。また、上欄の「卅八」の左側には「十一(折羅/下)」(墨  
筆)とあり。

○若(し)辨(返)(せ)不者彼然モ——心を事トシテ念誦  
(するか) \*如(し)。(上<sup>224</sup>、・は・しかも・こととす・て・)

\*「如」 返り点らしき符号(朱筆)があるが、未詳。

○\*爲(返)(は)所(る)一「ハ」雌(平)黄・二「ハ」牛黄  
・三(は)安(去)善(上)那(上)・四(は)朱砂 五(は)  
吐(去)他(上)香・「・」雄(去)黄(上)・「・」拔折羅・「・」  
牛蘇・「・」菖蒲・「・」光明朱・「・」鎖(上) \*子甲衣・「・」  
端繫(入)「イ、繫」布裳・「・」一鈷の又・「・」鹿(入)皮  
・「・」横(平)刀(去)・「・」絹\*索鐵鎧(去)「・」・「・」三  
鈷の又・「・」(上<sup>225</sup>、・は・は・サ・「・」サシ・「・」チフ・  
(・タンチフ・)・「・」シフ・(・タンチフ・)・ひし・ロクビ・)

\*「爲」 上欄に「確イ」(墨筆)とあるが、未詳。

\*「子」 読点(朱筆)を擦り消した跡あり。

\*「索」 読点(朱筆)を擦り消した跡あり。

○上「ノ」如(き)所説「ノ」成就(の)「之」物・皆(な)  
三種の成就「ヲ」具足(する)こと\*有(り)。(上<sup>228</sup>、・の・  
の・を・)

\*「有」 同字の下、文脈上不審な位置に読点らしき符号(朱筆)あり。

○假|使(ひ)餘の眞言法「ノ」中「ノ」説(返)(く)所(の)  
「イ、所説「ノ」諸(の)物・皆(な)此「ノ」三種の成就  
「ヲ」離(れ)不」。(上<sup>229</sup>、・の・の・の・この・を・)

○\*復(た)次(に)世間「ニ」諸の障難「ノ」毘那耶迦有(り)。

(上<sup>230</sup>、・に・の・)

\*「復」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「四十」(共に  
朱筆)とあり。

○過(返)「ヲ」覺ムル力爲「ノ」故(に)念誦の人「ニ」\*逐  
(ふ)。(上<sup>231</sup>、・とが・を・もとむ・が・の・に・したがふ・)



\*「逐」 右傍に「シタロ」（朱筆）とあり。

○何等「ヲカ」四（と）爲（す）。（上<sup>232</sup>、・を・か・）

○此「ノ」四部（返 從（り））无量「ノ」毘那夜迦「ヲ」流出「す」。（上<sup>233</sup>、・この・の・を・）

○摧壞部の主をは名（け）て无憂大將「ト」曰「フ」。（上<sup>234</sup>、・と・いふ・）

○其「ノ」部「ノ」中「ニ」七阿僧祇（返）\*有（り）（上<sup>234</sup>、・その・の・に・）

\*「有」 左下に曲線（墨筆）があるが、墨汚れか。

○護世（の）四王の所説の眞言を持誦（する）者（返）有（ら）は「イ、持誦「スルコト」有「ル」者「ヲ」<sup>〔も〕</sup>彼<sup>〔か〕</sup>障難「ヲ」作「ス」。（上<sup>235</sup>、・・・す・（・ヂズす・）・こと・あり

・もの・を・かれ・を・なす・）

○野干部の主をは名（け）「テ」象頭「ト」曰「フ」。（上<sup>236</sup>、・て・と・いふ・）

○其「ノ」部「ノ」中（返）「ニ」於（て）復（た）十八俱胝（の）眷屬有（り）。（上<sup>236</sup>、・その・の・に・）

○摩醯首羅の所説「ノ」眞言を「・」持誦（する）者（返）有（らは）「イ、持誦「スルコト」有「ル」者<sup>〔も〕</sup>「ニ」<sup>〔に〕</sup>彼障難（を）作（す）。（上<sup>237</sup>、・の・・・す・（・ヂズす・）・こ

と・あり・もの・に・）

\*「難」 右傍に「ノ」（墨筆）とあるが、未詳。  
○一牙部の主「ハ」名（けて）嚴髻「ト」曰「フ」。（上<sup>238</sup>、・は・と・いふ・）

○其「ノ」部「ニ」亦（た）一百\*三十俱胝の眷屬有（り）。

（上<sup>238</sup>、・その・に・）

\*「三」 同字から「眷」字にかけて右傍に注記（墨筆）があると思われるが、虫損により「三本」以降の文は未詳。

○大梵天王・及（ひ）憍尸迦・日月天子・那羅延神風神等の所説の眞言を持誦（する）者（返）有（らは）「イ、持誦「スルコト」有「ル」者<sup>〔も〕</sup>「ニ」<sup>〔に〕</sup>彼障難「ヲ」作「す」。（上<sup>239</sup>、・・・す・（・ヂズす・）・こと・あり・もの・に・を・）

○龍象部の主をは名（けて）頂一行「ト」曰（ふ）。（上<sup>341</sup>、・と・）

○其「ノ」部「ノ」中（返）「ニ」於（て）一俱胝那由多一千ノ波頭摩（返）有（る）を以（て）・眷屬「ト」爲。（上<sup>341</sup>、・その・の・に・の・と・）

○釋教の所説の諸（の）妙眞言を持誦（する）者（返）有（らは）「イ、持誦「返」「スルコト」有（る）者「ニ」<sup>〔に〕</sup>彼障難（を）作「す」。（上<sup>242</sup>、・・・す・（・ヂズす・）・こと・に・）

○又（た）訶（去）利（上）帝（上）の兒<sup>〔こ〕</sup>を名（けて）愛子「ト」曰（ふ）。（上<sup>243</sup>、・の・こ・を・と・）

○般（去）指（上）迦將の所説の眞言ニライテ「イ、眞言「ニ」<sup>〔に〕</sup>彼障難「ヲ」作（す）。（上<sup>244</sup>、・ハシ・・・（・バンシキヤサウ・）・に・をいて・（・おいて・）・に・を・）

○又（た）摩尼賢將の兒「ヲ」名（けて）滿賢（去）「ト」曰（ふ）。（上<sup>244</sup>、・を・と・）

○\*摩尼部の所\*説の眞言（返）「ニ」於（て）持誦（する）者（返）有（らは）彼の子滿賢「而」障難「ヲ」作（す）。（上<sup>245</sup>、・に・を・）

\*「摩」 「摩イ」、補入符にて右傍に補入（墨筆）。

\*「説」 補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○是（返）（の）如（き）諸の類（の）毘那夜迦各（の）本部（返）  
「ニ」於（て）「而」障礙「ヲ」作（す）。「イ、作（し）」「テ」  
行者（を）して成就（を）得令（むるを）<sup>「わ」</sup>樂「ハ」不<sup>す</sup>。（上  
246、・に・を・て・ねがふ・）

○自（ら）變化して本眞言（の）「之」主（返）「ト」作（り）  
て行者（返）「ヲ」成就「シ」供養（返）「ヲ」受（く）（上  
247、  
・と・を・ー・す・（・ジャウジュす・）・を・）

○時に明主來（り）て是（返）「ヲ」見已（り）本宮「ニ」却<sup>「か」</sup>  
「リ」還「ス」。（上248、・を・に・かへる・ー・す・（・グエン  
す・））

○富貴（返）「ヲ」\*求（め）は純に銀（返）「ヲ」用「テ」作  
「レ」。（上249、・を・を・もて・つくる・）

\*「求」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅七」（共に  
朱筆）とあり。また、上欄の「卅七」の左側には「十（求富／下）」（墨  
筆）とあり。

○海「」龍王の法（返）「ヲ」成就（せむには）熟—銅（返）  
「ヲ」以「テ」作「レ」。（上249、・を・を・もて・つくる・）  
○修羅宮（返）「ニ」入（ら）ハ「イ、入「ラムニハ」妙石（返）  
「ヲ」用（て）作「レ」。（上250、・に・ば・いる・む・に・は  
・を・つくる・）

○通して一切「ノ」法（返）「ヲ」成就（せむ）「ト」欲（は）  
は金\*銅銀（返）（を）\*以（て）相「ヒ」和して「而」作「レ」。  
（上250、・の・を・と・あひ・す・（・あひワす・）・つくる・）

\*「銅」 本行では「銀」字の下に記したものを、転倒符で訂す（墨筆）。

\*「以」 右傍に「ノ」（墨筆）とあるが、未詳。

○若（し）藥叉「ノ」衆（返）「ヲ」摧（く）コトヲ成就（せ  
む）「ト」欲（はは）應（に）鐵（返）「ヲ」以「テ」作「ル」  
「應」（再讀）「シ」。（上251、・の・を・こと・を・と・を・も  
て・つくる・べし・）

○无病「ヲ」得<sup>「エ」</sup>及（ひ）錢（去）財（上）（返）「ヲ」求「メモ  
ト」欲（はむ）「カ」爲「ニハ」\*失<sup>「シ」</sup>（上）利（上）般尼木・或  
（は）\*密（去）魯（上）婆（上）木「ヲ」（以て）・「而」金剛「ヲ」  
作「レ」。（上251、・を・を・う・を・もとむ・む・と・が・に・は  
・シ・ー・ー・（・シチリバンニモク・）・を・を・つくる・）

\*「失」 同字の上に一字あると思われるが、虫損により未詳。『大藏  
經』では「以」字とする。

\*「密」 右傍に「二字頂輪云櫓木也紫黄云々」（朱筆）とあり。

○一切の鬼魅の所「」着（返）「ヲ」\*療「セムト」欲（は  
は）却<sup>「キヤ」</sup>達（上）羅木（返）（を）用「て」拔折羅「ニ」作「レ」。  
（上253、・を・ー・す・（・レウす・）・む・と・キヤ・ー・ー・（・  
カクダチラモク・）・に・つくる・）

\*「療」 左下に朱のシミのようなものがあるが、汚れか。

○若（し）藥叉女（返）「ヲ」成就（せむ）「ト」欲（は）者摩（去）  
度（上）迦（上）木（返）「ヲ」用「テ」「而」拔折羅「ニ」作「レ」。  
（上254、・を・と・を・もて・に・つくる・）

○滅罪（返）「ヲ」求（めむ）「ト」欲（は）は阿（去）説<sup>「エチ」</sup>（入）  
他「ヲモテ」拔折羅「ニ」作「レ」。（上255、・を・と・ー・エチ  
・（・アエチタ・）・を・もて・に・つくる・）

○\*若(し) 諸の怨敵(返) 「ヲ」摧伏(せむ)と欲(は)者  
\*害「―」人木(返) 「ヲ」用「テ」「而」拔折羅「ニ」作「レ」。  
(上<sup>255</sup>、・を・を・もて・につくる・)

\*「若」 本行では「若」字が重複。

\*「害」 「害」字の上、「若イ」を補入符にて右傍に補入(墨筆)するも、未詳。

○極惡「ノ」怨敵(の)「之」者(返)を害(せ)ムト欲(はは)  
「イ、怨敵」返「ヲ」害(せむと)欲(ふ)「之」者「人「ノ」  
骨(返) 「ヲ」用「テ」拔折羅「ニ」作「レ」。(上<sup>256</sup>、・の・  
む・と・を・の・を・もて・につくる・)

○幻化(返) 「ヲ」成(せむと)欲(は)は水精(返) 「ヲ」用  
(て)作「レ」。(上<sup>257</sup>、・を・を・につくる・)

○若(し)人(返) (を)令(て)「イ、令」人「ヲシテ」  
極て相(ひ)憎(返) マ「令」(再讀) (めむと)欲(は)者苦  
練木(返) 「ヲ」用(て)拔折羅「ニ」作「レ」。(上<sup>258</sup>、・を  
・して・そねむ・を・に・つくる・)

○鬼類(返) 「ヲ」\*成就して「イ、成就」シ「及(ひ)人(返)  
(を)令(て)「イ、令」人「ヲシテ」枯(去)瘁(平)「イ、瘁」  
鬪諍等(返) (せ)「令」(再讀) (めむには)「イ、枯瘁鬪諍(せ)  
「令」(再讀) (めむ)等「ニハ」」而(て)毘(去)梨(上)勒(上)  
木(返) (を)用(て)拔折羅「ニ」作(れ)。(上<sup>259</sup>、・を・  
・す・(・ジャウジュす・)・を・して・コスイす・(・クズ  
イす・)・ヨウす・(・クズイす・)・に・は・ロー・  
(・ビリロクモク・)・に・)

\*「成」 259行と260行目の行間に、「三本云若欲成就龍女敬念之法以

龍木作拔折羅」(墨筆)と記す。

○若(し)天龍藥叉・乾「門十垂」婆・\*阿修羅(返) 「ヲ」  
成就(せむ)と欲(は)者應(に)天木(返) 「ヲ」以(て)  
拔折羅「ニ」作(る)「應」(再讀) (し)。(上<sup>260</sup>、・を・を・  
に・)

\*「阿」 補入符にて右傍に補入(墨筆)。

○若(し)龍女敬念(の)「之」法(返) 「ヲ」成就(せむ)と  
欲(はは)龍木の根(返) 「ヲ」以(て)拔折羅に爲(レ)。(上<sup>261</sup>、  
・を・を・につくる・)

○若(し)變形(の)「之」法(返) 「ヲ」成就(せむ)と欲  
(はは)泥(返) 「ヲ」以(て)之「ニ」作「レ」。(上<sup>262</sup>、  
・を・を・に・につくる・)

○若(し)起―\*死の法(返) 「ヲ」成就(せむと)欲(は)  
者應(に)迦(去)談(上)婆(上)木(返) 「ヲ」用(て)之「ヲ」  
作(る)「應」(再讀) (し)。(上<sup>263</sup>、・を・を・を・)

\*「死」 右傍に「屍イ」(墨筆)とあり。

○若(し)財(返) 「ヲ」求(めむ)と欲(はは)應(に)闕(上)迦(平)  
木(返) 「ヲ」以(て)或(は)龍木「ヲ」用(て)・或(は)  
无憂木もて之「ヲ」作「レ」。(上<sup>264</sup>、・を・カ・(・アチ  
ケモク・)・を・を・を・につくる・)

○若(し)對敵(返) (を)成就(せむと)欲(は)者應(に)失(上)  
利(上)般(去)尼(上)木「ヲ」・或(は)\*奄沒(上)羅木・  
或(は)闕(去)順(上)那木・或(は)柳木「ヲ」以(て)  
・之(を)作(れ)。(上<sup>265</sup>、・シ・(・シチリバンニ  
モク・)・を・エムモ・(・エムモチラモク・)・リウ・

(・ルモク・)・を・)

\*「奄」 右傍に「口ム」(朱筆)とあり。

○若(し)意樂(平)の法(返) (を)成就(する)を求(めむ)  
「ニハ」白檀木(返) 「ヲ」用(て)或(は)紫檀木(返) 「ヲ」  
用(て)拔折羅(に)作「レ」。(上<sup>266</sup>・に・は・を・を・つ  
くる・)

○上「ノ」如(き)所説(の)諸「ノ」拔折羅杵を「イ、拔折  
羅杵「ハ」」一一二皆(な)須申テ「而」五鈷・三鈷に作れ・。

(上<sup>268</sup>・の・の・は・に・もちゐる・て・)

○諸の妙端嚴「ニシテ」缺壞无「カラ」使(め)「ヨ」(上<sup>269</sup>、  
・・・なり・(・タンゴムなり・)・す・て・なし・しむ・)

○念誦(返)「セムト」欲「ハム」時「ニハ」塗香等(返)「ヲ」  
以(て)「而」供養を\*作「セ」。(上<sup>269</sup>・・・す・(・ネムズ  
す・)・む・と・おもふ・む・に・は・を・なす・)

\*「作」 補入符にて右傍に補入(墨筆)。

○大慈心(返)「ヲ」發(し)「て」手「ニ」金剛(返)「ヲ」  
執(り)「て」眞言「ヲ」念誦「セヨ」。(上<sup>270</sup>・を・に・を  
・を・・・す・(・ネムズす・))

○法事畢已(ら)は復(た)重「テ」供養を尊の足下(に)置  
「せよ」。(上<sup>270</sup>・かさねて・)

○若(し)妙拔\*折羅(返) (を)執持「セ」不「シテ」(上<sup>271</sup>、  
・・・す・(・シフヂす・)・ず・して・)

\*「折」 「折羅」の二字、補入符にて右傍に補入(墨筆)。

○其「ノ」形極「て」大「ナリ」。(上<sup>272</sup>・その・おほきなり  
・)

○焼香(返)「ヲ」獻(する)時「ニ」法若(し)闕(返) (す  
ること)有(れは)彼地(返)從(り)出(て)而便(ち)身  
「ニ」\*入(る)。(上<sup>272</sup>・を・に・に・)

\*「入」 右傍に仮名(墨筆)があると思われるが、虫損により未詳。  
○遂「ニ」行者(返) (を)令(て)「イ、[令]行者「ヲシテ」」  
諸「ノ」煩惱「ヲ」起(さ)「令」(再讀) (む)。(上<sup>273</sup>・つ  
ひに・を・して・の・を・)

○爲(返)ハ所ル慳貪・詔曲・忿恚なり。(上<sup>274</sup>・いふ・る・)

○\*頻(に)精(平) (返) (を)失シテ身(返) (を)令(て)  
不淨(なら)「令」(再讀) (む)。(上<sup>274</sup>・しきりに・いたす  
・て・)

\*「頻」 「頻」字と「失」字の間に補入符(朱筆)あり。補入符の右  
下に「頻」(墨筆)とあり。

○名(けて)燈―頂「ト」曰(ふ) (上<sup>275</sup>・と・)

○燈(返)を獻(する)「之」時「ニ」法若(し)闕(返) (す  
ること)有(れは)彼即(ち)身「ニ」入(る)。「イ、入(り)  
「テ」遂(に)行者(返) (を)令(て)「イ、[令]行者「ヲ  
シテ」種種の病「ヲ」生「セ」[令」(再讀) (む)。(上<sup>275</sup>・  
に・に・て・を・して・を・・す・(・シヤウズ・))

○爲(返) (は)所(る)心痛ム・壯―熱(音)シテ\*心「ヲ」。  
(上<sup>276</sup>・いたむ・ト・す・(・シヤウネツす・)・て・を・)

\*「心」 同字の上に補入符(朱筆)あり。補入すべき語は記されてい  
ないが、『大藏經』によれば「損」字の脱漏か。

○名(けて)笑\*花(と)曰(ふ)。(上<sup>277</sup>・)  
\*「花」 右傍に「ヲ」(墨筆)とあるが、不審。二文字下の「獻花」

の「花」字に付すべき仮名を誤って付したもののか。

○花(返)「ヲ」獻(する)「之」時「ニ」法若(し)＊闕(返)  
(すること)有(れは)彼即(ち)便(返) (を)得(て)遂  
「ニ」行者(返) (を)令(て)「イ、」令「行者「ヲシテ」  
種種の＊障「ヲ」起(さ)「令」(再讀) (む)。(上<sup>277</sup>、・を・  
に・つひに・を・して・を・)

＊「闕」 右傍に「ハ」(墨筆)とあるが、未詳。

＊「障」 「に」のヲコト点らしき符号(朱筆)があるが、未詳。

○爲(返)ハ所ル壯ニ熱クして鼻塞リ噴(去)＊嚏「イ、噴 嚏」

「イ、噴 嚏」(し)眼中「ヨリ」涙を出す「イ、出(し)

「て」支―骨酸(去)シク疼(平)「キ」「イ、酸疼」「ミ」

「イ、酸疼」「―」疼(し)・＊及(ひ)伴侶(返)與相「ヒ」

― 諍(ヒ)て離散(する)「ナリ」。(上<sup>278</sup>、・いふ・る・さかり

なり・あつし・ふさがる・はなひる・ホンタイす・(・ホンセ

フす・)・フンサウス・(・ホンセフす・)・より・くるし・ひ

ひらく・ひるむ・アイトウス・(・サンドウス・)・あひあら

そふ・なり・)

＊「嚏」 右傍に「□フシ」(墨筆)とあり。下方に「嚏」字の異体字

「𠂔(口+庚+ミ)」字(墨筆)を記す。

＊「及」 「及」字と「與」字の間に左寄りの合符(朱筆)あり。

○念誦(の)「之」時「ニ」法若(し)闕(すること)有(れ

は)彼即(ち)便(を)得。(上<sup>280</sup>、・に・)

○遂(に)行者(返) (を)令(て)「イ、」令「行者(を)「し

て」諸「ノ」病起(すこと)有(ら)「令」(再讀) (む)。(上

281、・の・)

○諸の毘那夜迦・身(返)「ニ」入(り)「テ」熾盛に心(返)  
「ヲ」令(て)迷惑(返) (せ)「令」(再讀) (め)西(返)「ヲ」  
以(て)東(返) (と)爲(オモ)ヒ諸の異相を作(さ)シム。(上<sup>281</sup>、  
・に・て・を・を・おもふ・しむ・)

○或(は)即(ち)吟―詠して或(は)縁レル事(返)无(く

して)遊行(返)「ヲ」得(む)「ト」欲(ひ)心に異相(返)

「ヲ」懷(き)て決(返)「セ」＊不(る)所有ルニ便(ち)

邪見「返」「ヲ」起(し)「て」是(返) (の)如(き)言(返)

「ヲ」作「して」或(は)大我の眞言(返)有(る)「コト」无

「シト」説「ク」(上<sup>283</sup>、・よる・り・を・と・を・す・)

クエチす・)・あり・に・を・を・こと・なし・と・とく・)

＊「不」 右傍に「レ」(墨筆)があるが、未詳。

○亦(た)纏縛无(し)・及(ひ)解脱(返)「ヲ」以(て)持

― 誦(者)其の功(二)を＊虚(二)―捐(する)なり「ト」

「イ、虚「シク」捐「ス」(と)説(三)ク。(上<sup>285</sup>、・を・の

・もの・その・を・なり・と・むなし・す・(・エンす・)

・とく・)

＊「虚」 「の」のヲコト点らしき符号(朱筆)があるが、未詳。

○此「ノ」邪見(返) (を)以「て」心(返)與相應して遂「ニ」

此「ノ」言(返)「ヲ」出(し)「て」因果「ヲ」撥无す。(上

286、・この・つひに・この・を・を・)

○手(返)「ヲ」以(て)草(返)「ヲ」斷リ＊及(ひ)土―塊(返)

ヲ＊弄(モテアッ)ヒ眠ル時「ニハ」・齒(二) (返)「ヲ」＊嚙(二)シ

或(は)欲「ノ」想(返)「ヲ」起「シ」及(ひ)妻を娶ラム

ト欲(ふ)。「イ、妻「ニ」娶「セムト」欲「ハ、」自

(ら) 愛樂(する)者をは彼相「ヒ」愛「セ」不。(上 287、  
・を・を・きる・つちくれ・を・もてあそぶ・ねぶる・に・は  
・を・はがみす・の・を・おこす・とる・む・と・に・とつぎ  
す・む・と・おもふ・ば・みづから・アイ・す・(・アイラク  
す・)・あひ・す・(・あひアイす・)・じ・)

\*「及」 同字の左下に縦線(朱筆)があるが、未詳。

\*「弄」 左傍に「捺イ」(墨筆)とあり。本行も「捺」の字体で記さ  
れているが、字体統一の方針上「弄」字で反映している。

\*「嚙」 同字の下に「嚙」(墨筆)とあり。本行の字体が難読であつ  
た為であろうか。

○自(ら) 樂愛(返) (せ) 不(れ) は彼即(ち) 愛樂「セム」。  
(上 288、・・・す・(・アイラクす・)・む・)

○既(に) 意(返) 「ニ」順(は) 不(上 289、・に・じ・)

○臥「テモ」 「而」睡(ら) 不。(上 289、・て・も・ねぶる・  
じ・)

○邪行(返) を作(さむと) 欲(ひ) て竟(よも) 夜(スカ) 眠(ネフ) 不。(上 289、

・よもすがら・ねぶる・)

○設(若ヒ睡(返) (るを) 得は夢に大\*虫(訓) 師子・虎狼  
・猪狗「ニ」趁(返) メ所(ラ) (たる) 「イ、」 「所」 趁「ハル」

「イ、趁「メ」所(れたる)」 駝驢・猫兒・及(ひ) 鬼・野干  
鷲鳥・鷲鷲・及(ひ) 草(去) 胡(平) 「ニ」 を見「ニ」

(む)。(上 290、・たとひ・に・とむ・らる・をふ・(・おふ・)  
・る・せむ・メウジ・(・メウニ・)・さぎ・クン・(・クン

ゴ・)

\*「虫」 右傍に「鬼イ」(墨筆)とあり。

○或時に「ハ」夢に故(破)の衣(返) を着(たる) 不淨(の)  
「之」人を見「ム」。(上 291、・は・の・を・きる・みる・む  
・)

○或時「ニハ」夢に裸形にして\*髡レタル「イ、髡「チタル」  
\*髡黒―體(の) 「之」人を見(む)。(上 292、・に・は・おほ  
どる・たり・をつ・(・おつ・)・たり・)

\*「髡」 右傍に「苦門反」(朱筆)とあり。

\*「髡」 補入符にて下欄に補入(墨筆)。

○或時(に) は夢(に) \*裸―形「ノ」 外道「ヲ」 見(む)。  
(上 293、・の・を・)

\*「裸」 右傍に「ヲ」(墨筆)とあるが、未詳。

○或(は) 枯(カ)レ池・及―以(ひ) 枯井を見(む) (上 293、・か  
れいけ・)

○云何(そ)・如來・彼「ノ」誓願「ヲ」許シテ行人「返」 「ヲ」  
惱亂(する) \*者法「返」 「ヲ」令(て) 成(せ) 不(ら) 「令」 (再讀  
(む) (上 294、・かの・を・ゆるす・て・を・を・)

\*「者」 同字に返り点らしき符号(墨筆)があるが、未詳。

○唯「シ」 大明眞言(の) 「之」 教(返) 有(り) (上 296、・た  
だし・)

○法(返) (の) 如(く) 修行(し) て斯の障礙を免「レ(よ)」  
「イ、免「シ」」。(上 297、・まぬかる・す・(・メンズ・)

○是「ノ」 故「ニ」 行者・誦「スル」 數・滿(し) 已(り)  
て「イ、已(ら) 「ハ」・復(た) 應(に) 更に成就諸事の妙  
漫荼羅(に) 入(る) 「應」 (再讀) (し) 此(の) 法(返) (を)

作(り) 「イ、應(に) 更(に) 成就諸事(の) 妙漫荼羅(に)

入(り)「テ」此「ノ」法「ヲ」作「ル」[應](再讀)(し)「已」<sup>(を)</sup>  
ヌ(れは)「イ、已(り)」「ナハ」彼(の)障難者・便即(ち)  
退散シヌ。(上<sup>297</sup>、・この・に・す・(・ズす・)・かず・ば  
・て・この・を・つくる・をはる・ぬ・ぬ・ば・す・(・  
タイサンす・)・ぬ・)

○\*復(た)次(に)持誦「シ」供養「シ」及|以(ひ)護摩  
「セムニ」・法教(返)「ニ」依「ラ」不(れ)は彼等便(返)  
(を)得て「而」障難「ヲ」作(す)。(上<sup>300</sup>、・す・(・  
ズす・)・す・(・クヤウす・)・す・(・ゴマす・)  
・む・に・に・よる・を・)

\*「復」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅三」(共に  
朱筆)とあり。

○又(た)行者・心「ニ」常(に)猶|豫して念念「ニ」疑(返)  
「ヲ」生(し)爲シ此(の)明主(返)ヲヤ誦「セマシ」爲シ  
彼(返)ヲヤ誦「セマシ」「耶」。(上<sup>301</sup>、・に・に・を・もし・  
をや・す・(・ズす・)・まし・もし・をや・す・(・ズす  
・)・まし・)

○是(返)(の)如(く)念(返)「ヲ」作「スニ」彼亦(た)  
便「ヲ」得。(上<sup>302</sup>、・を・なす・に・を・)

○又復(た)行者多(く)義无(き)語して世俗の事(返)「ヲ」  
談(し)或(は)興「|」易ヲ説キ或(は)田農(返)を説キ  
或(は)名利(返)を論(す)。(上<sup>302</sup>、・を・ヤク・(・コウ  
ヤク・を・とく・を・とく・)

○斯等の語(返)「ヲ」説(く)「ニ」彼「ノ」障難者・自然(に)  
便(返)「ヲ」得「テ」歩歩隨「|」遂「して」心(返)「を」

令(て)散亂(せ)「令」(再読)(む)。(上<sup>304</sup>、・を・に・か  
の・を・て・)

○譬(は)人(返)有(り)「て」水(返)に尋ヒテ「而」行(け)  
は「イ、行(く)」「に」影水(返)「に」\*入(りて)形と影  
と(を)現して隨遂して相「ヒ」捨離「セ」不(る)「カ」如  
(し)。(上<sup>205</sup>、・そふ・て・あひ・す・(・あひシヤリす・)  
・が・)

\*「入」 「せよ」のヲコト点らしきもの(墨筆)があるが、未詳。

○毘那夜迦・行者の身(返)「ニ」入(り)「て」恆「ニ」相  
(ひ)離(返)(れ)不(る)こと亦復(た)是(の)如(し)  
(上<sup>206</sup>、・に・つねに・)

○澡浴(の)「之」時「ニ」・便(返)(を)得(て)身「ニ」  
入(る)。(上<sup>207</sup>、・に・に・)

○有「ハ」供養「ノ」時「ニ」便(返)「を」得「て」身「ニ」  
入(る)。(上<sup>208</sup>、・あるいは・の・に・に・)

○譬(は)日の光照(す)に火珠(返)「ヲ」以(し)て「而」  
便(ち)火出「ツルカ」如「シ」(上<sup>308</sup>、・を・いづ・が・ご  
とし・)

○毘那夜迦・行者(の)身(返)(に)入(りて)念誦(の)「之」  
時心(返)「を」令(て)散亂「返」(せ)「令」(再讀)(め)  
貪瞋无明等の火(返)「ヲ」増\*長「スル」(こと)亦復(た)  
是(の)如「シ」。(上<sup>209</sup>、・を・す・(・ソウチャウす・)  
・ごとし・)

\*「長」 右傍に「スル口」(墨筆)とあり。

○洗浴(の)「之」・\*時「ニ」法若(し)闕(返)「スルコト」

有「レハ」<sup>ハ</sup> 彼<sup>カ</sup> 即<sup>レ</sup> (ち) 身<sup>ミ</sup> (返) 「ニ」入<sup>レ</sup> (りて) 遂<sup>ス</sup> 「ニ」

「令」\*行「―」者<sup>シテ</sup> (をして) 種\*種「ノ」起<sup>ス</sup> (す)。「イ、起<sup>シ</sup> (し)」「テ」(上<sup>311</sup>、・に・す・(・コチす・)・こと・あり・ば・かれ・に・つひに・の・て・)

\*「時」 「時「ニ」法」の箇所は右傍に補入(墨筆)。

\*「行」 「をして」のヲコト点らしきもの(墨筆)があるが、不審。

本来なら「者」字に付されるべきものか。

\*「種」 『大蔵經』によれば「病」字の脱漏か。

○所<sup>イハユ</sup>爲「ル」飢渴・咳<sup>カイ</sup> (去) 嗽<sup>ソウ</sup>・懈「―」怠・多「―」睡四支沈重「なり」・(上<sup>311</sup>、・いはゆる・ガイソウ・(・ガイス・))

○名(け)て食香「ト」曰<sup>フ</sup> (ふ)。(上<sup>313</sup>、・と・)

○塗香(返) 「ヲ」獻<sup>スル</sup> (する) 時「ニ」法若<sup>シ</sup> (し) 闕<sup>返</sup> (すること) 有<sup>レハ</sup> (れば) 彼即<sup>チ</sup> (ち) 身「ニ」入<sup>ル</sup> (る)。「イ、入<sup>リ</sup> (り)「て」遂<sup>ツヒ</sup>ニ行者<sup>返</sup> (を) 令<sup>テ</sup> (て)「イ、[令]行者「をして」腹「ニ」病<sup>を</sup> (を) 起<sup>ス</sup> (こと) 有<sup>ラ</sup> (ら)「令」(再読) (む)。

(上<sup>313</sup>、・を・に・に・つひに・に・)

○爲<sup>イ</sup> (返) ハ所ル思想「して」・生縁の處<sup>返</sup> 「ヲ」憶<sup>ヒ</sup>「ヒ」或<sup>ハ</sup> (は) 餘「ノ」處<sup>返</sup> 「ヲ」思<sup>ヒ</sup> (ひ) 或<sup>ハ</sup> (は) 寡人<sup>返</sup> 「ヲ」思<sup>ヒ</sup> (ひ) 而「懈怠「ヲ」生「ス」。(上<sup>314</sup>、・いはゆる・を・おもふ・の・を・を・を・す・(・シヤウズ・))

○或<sup>ハ</sup> (は) 欲想<sup>返</sup> (を) 思<sup>ヒ</sup> (ひ) 諸境「ヲ」分別<sup>ス</sup> (す)。(上<sup>315</sup>、・を・)

○\*又<sup>タ</sup> (た) \*四瓶<sup>もて</sup> (もて)・次第<sup>返</sup> (に) 應<sup>返</sup> (に) 頂<sup>返</sup> (に) 灌<sup>ス</sup>ク「應」(再読) (し) (上<sup>316</sup>、・そそく・)

\*「又」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅六」(共に

朱筆)とあり。

\*「四」 上欄に「十五(四瓶/下)」(墨筆)とあり。

○作法已<sup>ラ</sup> (ら) は彼の所着の障即<sup>チ</sup> (ち) 解脱「ヲ」得<sup>ス</sup> (得)。(上<sup>316</sup>、・を・)

○此の漫荼羅は獨<sup>リ</sup> (り)「イ、獨<sup>音</sup>」能<sup>ク</sup> (く) 毘那夜迦<sup>返</sup>「ヲ」除<sup>ク</sup> (く) に非<sup>ス</sup> (す) (上<sup>317</sup>、・を・)

○亦<sup>タ</sup> (た) 衆生の種種の勝願「ヲ」滿<sup>ス</sup> (す)。(上<sup>317</sup>、・を・)

○謂<sup>イハユ</sup>ル工<sup>平</sup> 商<sup>平</sup> 農<sup>平</sup> 士<sup>去</sup>・男女・失<sup>入</sup> 昏<sup>昏</sup>・

是<sup>返</sup> (の) 如<sup>キ</sup> (き) 等の事心<sup>返</sup> (に) 稱<sup>カ</sup>ハ不<sup>ル</sup> (る)「コト」无<sup>シ</sup> (し)。(上<sup>318</sup>、・いはゆる・コン・(・シチコン・)・かなふ・こと・なし・)

○魍魎「ニ」着<sup>ケル</sup> (返) (さ) 所<sup>レ</sup>「イ、所着「レ」」及<sup>ヒ</sup> (ひ)

\*然熱<sup>返</sup> (を) 患<sup>ヘム</sup> 孩<sup>カイ</sup>「去」子<sup>子</sup>「ノ」・鬼魅<sup>アルホサ</sup>に着<sup>返</sup> (返) サ所<sup>レ</sup>及<sup>ヒ</sup> (ひ) 精<sup>平</sup> (を) 吸<sup>フ</sup> 靈<sup>平</sup>・鬼<sup>平</sup>「ノ」・常<sup>返</sup> (に) 惡夢<sup>返</sup> (を) 見<sup>ル</sup> (ると) 癲<sup>平</sup> 〓「疔十間」(平) 等の病所\*有<sup>アラユ</sup>ル一\*切<sup>切</sup>の病<sup>ヤマヒ</sup>ニ・此の漫荼羅の法<sup>返</sup>「ヲ」作<sup>リ</sup> (り) 自<sup>ラ</sup> (ら)

灌頂<sup>返</sup> (し) 已<sup>ラ</sup> (ら) は上<sup>返</sup> (の) 如<sup>キ</sup> (き) 等の類の求<sup>メ</sup> (め)

「―」窺<sup>ウ</sup> (返) マム所の者皆<sup>ナ</sup> 滿足<sup>返</sup> (せ) は諸一餘<sup>返</sup> (の) 病\*〓「疔十尒」(平) 亦復<sup>返</sup> (た) 能<sup>ク</sup> (く) 除<sup>カム</sup> (上<sup>319</sup>、・に・くるほす・くるほす・る・うれふ・む・ガイ・(・ガイシ・)・の・くるほす・る・すふ・の・あらゆる・やまひ・に・を・のぞむ・む・シン・(・ビヤウシン・)・のぞく・む・)

\*「然」 『大蔵經』では「壯」字とする。

\*「有」 補入符にて右傍に補入(墨筆)。

\*「切」 「〓(切一刀十入)」字を重書にて訂す(墨筆)。



\*「II」(「广+尔」) 左傍に「目忍反直引反疾也」(墨筆)とあり。

○\*時(に)彼の行者・諸の障難(返)「ニ」於(て)解脱(返)「ヲ」得已レハ身心清淨にして諸「ノ」垢穢无(し)。「イ、无(き)」「コト」譬(は)明「」月の雲(返)從於(り)「イ、」從於」雲「ヨリ」出(て)風(に)撃タレ「イ、風撃「チ」」雲除テ暉(平)麗(去)シク「乎」天(返)を光「スカ」如(し)」(上<sup>324</sup>、・に・を・をはる・ば・の・こと・の・より・うつ・る・うつ・のぞこる・て・ひかり・うるはし・を・てらす・が・)

\*「時」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅九」(共に朱筆)とあり。

○行者の所修の種種の功德もて毘那夜迦の所作の障難皆(な)悉(く)消滅(する)こと(も)亦復(た)是(の)如(し) (上<sup>326</sup>、・こと・)

○\*所以(の)眞言・成就(する)「ヲ」得不<sup>す</sup>。(上<sup>327</sup>、・を・)

\*「所」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「五十二」(共に朱筆)とあり。

○\*譬(は)種子・地及(ひ)時・并「ニ」雨「ノ」・漑<sup>ソク</sup>「去」キ澤<sup>(ウ)ルヲ</sup>シ調順の好と風(返)に因(り)て\*然芽生<sup>ケ</sup>「シ」\*及(ひ)成就<sup>ニ</sup>至ル可「キカ」如「下」(し)。(上<sup>327</sup>、・ならびに・の・そそく・うるをす・(・うるほす・)・ゲ・す・(・シヤウズ・)・に・に・いたる・べし・が・)

\*「譬」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「五十三」(共に朱筆)とあり。

\*「然」 右傍に「モノ」(墨筆)らしき仮名があるが、未詳。

\*「及」 右傍に「乃イ」(墨筆)とあり。

○然「モ」其の種子若(し)倉の中(返)「ニ」在(ら)は芽スラ尚(ほ)\*生「セ」不<sup>す</sup>(上<sup>329</sup>、・しかも・に・すら・す・(・シヤウズ・)・)

\*「生」 「主」字を重書にて訂す(墨筆)。

○況(や)復(た)枝葉・及(ひ)花菓實「上」ヲヤ(上<sup>329</sup>、・をや・)

○眞言(返)「ヲ」\*持誦(するも)法則(返)「ニ」依(ら)不<sup>す</sup>及(ひ)供養「セ」不<sup>す</sup>。(上<sup>330</sup>、・を・に・す・(・クヤウス・)・)

\*「持」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「五十一」(共に朱筆)とあり。

○其(の)眞言の字或(は)加<sup>タヘリ</sup>「」減「返」有「リて」聲「」相正<sup>タ</sup>「シ」(から)不<sup>す</sup>。(上<sup>330</sup>、・くははり・あり・ただし・)

○廣大ノ諸の妙悉地(返)「ニ」成(せ)\*不(ること)亦復(た)是(の)如(し) (上<sup>331</sup>、・の・に・)

\*「不」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「五十四」(共に朱筆)とあり。

○\*譬(は)雲(返)(を)興<sup>オコ</sup>シ雨(返)を下<sup>クタ</sup>ス「イ、興雲「ノ」雨(を)下(す)」諸の草木(返)「ニ」隨(ひて)而滋―茂(返)を含(むに)大小「ノ」花菓・差別等(返)(しから)不(る)「カ」如(し) (上<sup>332</sup>、・おこす・くだす・の・に・の・が・)

\*「譬」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍に「五十五」(朱筆)とあり。

○持誦(の)「之」人「ノ」・施(返) (す) 所の功勞其の増減に隨(ひて) 福(返) 「ヲ」獲(る) 「コト」多「ク」少(け) 「レハ」獲(返) (る) 所の「イ、所獲「ノ」」成就を「モ」亦復(た) 是(の) 如(し) (上<sup>333</sup>、・の・の・を・こと・おほし・すくなし・ば・の・も・)

○\*若(し) 其れ「イ、其「ノ」」行者清淨(の) 處(返) (に) 於(て) 「イ、「於」清淨「ノ」處「ニシテ」」 \*及(ひ) 時―節(返) 「ニ」依「リ」所制(の) 「之」 \*法亦(た) 罪を \*戲―犯して「イ、戲犯「スルコト」」漸く須(く) 滅して「イ、滅「シ」」・福聚圓滿(に) 「して」・能(く) 眞 \*言「ノ」 沽<sup>ウルホヒ</sup>及(ひ) 成就を獲「須」(再讀) (し)。(上<sup>335</sup>、・その・の・に・して・に・よる・・・す・(・ケボムす・)・こと・・す・(・メツす・)・の・うるほひ・)

\*「若」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍に「五十」(朱筆)とあり。

\*「及」 「及」字と「依」字の間に、左寄りの合符(朱筆)あり。

\*「法」 返り点(朱筆)があるが、未詳。

\*「戲」 同字の上、「虧」字を補入符にて右傍に補入(墨筆)するも未詳。

\*「言」 句点(朱筆)あり。

○\*若(し) 罪滅(返) (せ) 不功德(返) (を) 生(せ) 不法則(返) 「ニ」依(ら) 不(は) 眞 \* 夢に破壊の「イ、破壊「シテ」」人ノ・棄捨(返) (せ) 所(れ) タルヲ「イ、棄捨(せ) 所「ル、ヲ」」見 或(は) 石礎<sup>ソコ</sup>「イ、石―礎」(を) 見 或(は) 恐 \* 怖(し) 難「ヲ」畏(れる) 「之」人ノ手に槍・

刀・及(ひ)―諸の器仗(返) を執(り) て來(り) て相「ヒ」害(せむ) 「ト」欲(二) 「ト」見(三) (る)。(上<sup>337</sup>、・に・・・す・(・ハエす・)・て・の・たり・を・らる・を・いしつち・・ツイ・(・ジャクツイ・)・を・の・サウ・あひ・す・(・あひガイす・)・と・す・と・)

\*「若」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍・上欄に「卅七」(共に朱筆)とあり。

\*「夢」 上欄に「十口〈夢見／下〉」(墨筆)とあり。

\*「怖」 補入符にて右傍に補入(墨筆)。

○若(し) 此「ノ」相(返) 有(ら) は即(ち) 彼等の毘那夜迦の障礙を作(さ) 令(む)。(上<sup>340</sup>、・この・)

○\*行者即(ち) 軍荼利忿怒明主の眞言(返) (を) 用て「而」護身を作「レ」。(上<sup>340</sup>、・つくる・)

\*「行」 同字の上に丸印(朱筆)あり。右傍に「卅八」(朱筆)とあり。

○上「ノ」如(く) 說(返) (く) 所(の) 「イ、所說「ノ」」護摩は「イ、護摩「ノ」」障礙悉(く) 解脱(返) 「ヲ」得「テ」惱亂(すること) 能(は) 不。(上<sup>341</sup>、・の・の・の・を・て・)

○若(し) 彼の眞言(返) 「ヲ」念誦(すること) 有(ら) 者<sup>ハ</sup> 諸の毘那夜迦・終「ニ」便(を) 得不。(上<sup>342</sup>、・を・つひに・)

○\*復(た) 次(に) 彼の所着の障(返) (を) 除(き) 解脱(返) を \* 爲ムト欲(は) は「者」即(ち) 應(に) 此の妙漫荼羅に依(る) 「應」(再讀) (し)。(上<sup>344</sup>、・す・む・と・)

\*「復」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「卅五」（共に朱筆）とあり。

\*「爲」 右傍に「得也」（朱筆）とあり。

○其（れ）牛群「ノ」所居（の）「之」處「ニ」・或（は）樹下に有（り）。（上<sup>345</sup>、・の・に・）

○或（は）神「平」廟「ニ」・或（は）四衢道「ニ」・或（は）空閑の室「ニ」\*有（り）。（上<sup>345</sup>、・に・ク・（・シグダウ・）に・に・）

\*「有」 「を」のヲコト点（朱筆）があるが、未詳。

○或（は）林の中（返）に於（て）「イ、」於「林（の）中（に）して」五色ノ彩（返）ヲ\*以（て）漫荼羅「ヲ」作「レ」。（上<sup>346</sup>、・の・いろ・を・をつくる・）

\*「以」 同字の一部を墨筆にて補った跡あり。

○其の量「ハ」頓方四肘にして「イ、四肘（に）「セヨ」」四門を安立せよ。（上<sup>347</sup>、・は・ホウ・（・トンハウ・）・す・）

○中（返）（に）於（て）二肘「ハ」・方一量「ニ」\*抗（返）ヲ穿テ「イ、穿「レ」」\*坑「ノ」内「ニ」布「クニ」茅草「ヲ」以（し）坑の外「ノ」\*雨肘に各（の）位座（返）「ヲ」分て明主・眞言主等を安置セヨ。（上<sup>348</sup>、・は・ホウ・（・ハウラウ・）に・あな・を・うがつて・ほる・の・に・しく・に・に・を・の・を・わかつて・す・（・アンチす・））

\*「抗」 『大蔵經』では「坑」字とする。

\*「坑」 本来脱漏していた文字を、墨筆にて書き入れた跡あり。

\*「兩」 『大蔵經』では「兩」字とする。

○「於」八方の所に各（の）本方の大神「ヲ」畫（け）。（上

349、・を・）

○復（た）四箇の新（し）「キ」瓶を取（れ）。（上<sup>350</sup>、・あたらし・）

○黒色にして大（た）\*焦レ（たる）者を得不れ。（上<sup>350</sup>、・こがる・）

\*「焦」 同字の下に一字あるも、虫損により不明。右傍に「カマレキ」（朱筆）とあり。『大蔵經』では「生」字とする。

○香水（返）を盛（り）滿（て）て\*及（ひ）\*寶「上」・并（せ）て「イ、并「ニ」」赤蓮花・諸の花樹の枝（返）を「イ、枝「ノ」」以て皆（な）\*瓶中「ニ」。（上<sup>351</sup>、・ならびに・の・の・に・）

\*「及」 「及」字と「以」字の間に、左寄りの合符（朱筆）あり。

\*「寶」 同字の上に一字あると思われるが、虫損により不明。『大蔵經』では「五」字とする。

\*「瓶」 同字の上に一字あると思われるが、虫損により不明。『大蔵經』では「内」字とする。

○五色の線（返）ヲ以「て」其「ノ」瓶の項（返）ニ「イ、項「ニ」」纏フテ「於」四方に安（せよ）。「イ、安（し）「て」」（上<sup>352</sup>、・いと・を・その・うなじ・に・くび・に・まつふ・て・）

○然して後「ニ」應（に）彼の\*朋主等（返）「ヲ」請「して」諸「ノ」供養「ノ」具（返）「ヲ」以（て）而て之「ヲ」供養「す」「應」（再讀）（し）。（上<sup>352</sup>、・に・を・の・の・を・を・）

\*「朋」 『大蔵經』では「明」字とする。

○復（た）酒「・」肉・蘿蔔・及「以（ひ）衆多「ノ」波\*羅

\*羅食(返) 「ヲ」以「て」彼等の八方の大神・及(ひ) 諸の一切の毘那夜迦に供養せよ。(上<sup>353</sup>、・の・を・)

\*「羅」 「の」のヲコト点(朱筆)あり。

\*「羅」 補入符にて右傍に補入(墨筆)。

○彼の着障(の)「之」人(返) 「ヲ」呼(ひて) \*塊の中(返) 「ニ」入(り)「テ」東(返) 「ニ」向(ひ)而坐(せ)令(め)「ヨ」。(上<sup>355</sup>、・を・に・て・に・しむ・)

\*「塊」 『大藏經』では「坑」字とする。

○然して後「ニ」彼の所置(の)「之」瓶(返)を取(り)て軍吒利明主・囉枳(上) 〈ニ／合〉當(去)伽(上) 〈\*此／云赤／形〉明主・及(ひ)繼(上)喇(上) 〈ニ／合〉吉(上)囉(上) 〈ニ／合〉明主・捺(上)羅(上) 〈ニ／合〉弭(上)良(上)拿(上) 〈短ニ／合〉明主等の眞言(返) 「ヲ」以「て」其「ノ」瓶(返) 「ヲ」持誦(せ)「ヨ」(上<sup>355</sup>、・に・ラ・ター・(・ラキタウギヤ・)・キ・キ・(・ケリキチラ・)・(・ナツラミラウナ・)・を・その・を・す・(・ヂズす・)・)

\*「此」 「に」と「は」のヲコト点(朱筆)あり。

○數<sup>(か)</sup>百に過(くれは) 與<sup>(タメ)</sup>ニ彼の頂に灌<sup>(ソク)</sup>ケ(上<sup>358</sup>、・かず・ために・そそく・)

○是(返) (の)如(く)就<sup>(スナハ)</sup>ク「イ、就(ち)」應(に)夢の中(返) 「ニ」入(りて)障<sup>(ヨ)</sup>の因(返) 「ヲ」見示(す)「應」(再讀(し))(上<sup>358</sup>、・よく・すなはち・に・を・)

○眞言の字にて\*加減シ或(は)法(の)具<sup>(ナ)</sup>せ不(二)有(る)を\*説(二)(く)「イ、眞言(の)字(に)加減有「ルソトモ」

或(は)\*法「ノ」具(せ)不<sup>(ナ)</sup>「ルソトモ」\*説(く)。(上<sup>359</sup>、・す・(・ケゲムす・)・あり・ぞ・とも・の・ず・ぞ・とも・)

\*「加」 右傍に「シ」(朱筆)を擦り消した跡あり。

\*「説」 「の」のヲコト点(朱筆)らしき符号があるが、未詳。

\*「法」 補入符にて右傍に補入(墨筆)。

\*「説」 右傍に「ニハム」(墨筆)とあるが、未詳。

○然も諸の明主・自(ら)此の法(返)を説<sup>(ナ)</sup>キ行「」用(返)有(る)「トキニハ」「者」「於」\*破―相を示現(す)好<sup>(コトナ)</sup>キコト「イ、「於」破(れ)「タル」相好「ヲ」示現「す」・由<sup>(ナ)</sup>ホ海潮の終に時を違(へ)不(る)か如(く)して「イ、如「シ」」。其(れ)實には眞言「ハ」・終に相(ひ)破(返)せ不<sup>(ナ)</sup>(上<sup>360</sup>、・とく・とき・に・は・ことなし・こと・たり・を・なほ・ごとし・は・)

\*「破」 左傍に丸印(墨筆)あり。

○亦(た)相(ひ)斷して及與(ひ)繼<sup>(ケイ)</sup>去<sup>(ナ)</sup>縛<sup>(ナ)</sup>せ不<sup>(ナ)</sup>。(上<sup>361</sup>、・ケイ・す・(・ケバクす・)

○譬(は)二(り)の親友(の)「之」人有(り)。中(返)「ニ」於(て)一(返)リ有(り)て彼(の)友<sup>(ト)</sup>ニ語<sup>(カタ)</sup>フテ言(は)く今(返)從(り)\*以(て)去(り)其の家(返)「ニ」往(き)乃至(し)彼の人「ヲ」語(ふ)「コト」勿<sup>(ナ)</sup>れ。是「ノ」友(返)(を)敬(する)「カ」故(に)言<sup>(ナ)</sup>誨に「イ、言<sup>(ナ)</sup>誨「ヲ」違<sup>(ナ)</sup>(へ)不<sup>(ナ)</sup>。即(ち)之<sup>(コ)</sup>ニ「イ、之ニ」往<sup>(ナ)</sup>キ乃至(し)語<sup>(ナ)</sup>話(入)(返(せ)不(るか)如<sup>(ナ)</sup>「三」く(上<sup>362</sup>、・に・ひとり・とも・に・かたらふ・て・に・を・こと・この・が・を・たがふ・ここ・

に・そこ・に・ゆく・クワイす・（・ゴクワイす・）

\*「以」 補入符（朱筆）あり。右傍に同字を補入（墨筆）。

○故に行人應（に）明主及（ひ）眞言（返）を相（ひ）破す  
「應」（再讀）（から）不（し）て乃至（し）繼續して及（ひ）以  
（ひ）妙漫茶羅を禁\*斷「スヘ」（し）。（上<sup>364</sup>、・・・す・（・  
コムダンす・）・ベし・）

\*「斷」 右傍に「スヘ□」（墨筆）とあり。

○亦復（た）應（に）彼の法を迴（<sup>ひ</sup>平）シ\*換（平）「ス」  
「應」（再讀）（から）不<sup>す</sup>。（上<sup>366</sup>、・かへす・クワンす・（・グ  
ワンす・））

\*「換」 右傍に「火（墨筆）ン（朱筆）□（朱筆）」とあり。

○亦復（た）應（に）阿（平）吠（上）（去）\*設（上）那（上濁）  
ス「應」（再讀）（から）不<sup>す</sup>。（上<sup>367</sup>、・・・・・す・（・アバイ  
セチナす・））

\*「設」 右傍に「守護」（朱筆）とあり。

○彼（返）「ヲ」害（せむ）「カ」爲の故「ニ」應（に）護摩「シ」  
及（ひ）支節（返）を損「シ」鬼族（を）摧滅す「應」（再讀）  
（から）不<sup>す</sup>。（上<sup>367</sup>、・を・が・に・・・・・す・（・ゴマす・）・  
・す・（・ソンず・））

○亦復（た）應（に）他（返）を令（て）「イ、」令「他「ヲシ  
テ」癡鈍に（して）「イ、癡鈍「ナラシメ」及（ひ）以（ひ）  
悶眠「セシム」「應」（再讀）（から）不<sup>す</sup>。（上<sup>368</sup>、・を・して  
・・・・・なり・（・チドンなり・）・しむ・・・・・す・（・モンメン  
す・）・しむ・）

○應（に）龍魅（の）「之」類を\*科罰「入」「ス」「イ、罪  
ツミヌ

罰」「應」（再讀）（から）不<sup>す</sup>。（上<sup>369</sup>、・・・・・す・（・クワボチ  
す・）・つみす・）

\*「科」 右傍に「苦和反斷也」（朱筆）とあり。

○應（に）人（返）ヲ令（て）相（ひ）\*増（<sup>ソネ</sup>返）ムコトヲ發  
起して及（ひ）損し厭し縛す「應」（再讀）（から）不<sup>す</sup>。（上<sup>369</sup>、  
・を・あひそねむ・こと・を・）

\*「増」 『大藏經』では「憎」字とする。

○應（に）<sup>ヤウ</sup>「女十嬰」兒（の）「之」魅（<sup>スグマ</sup>を）「イ、魅レタ  
ルヲ」治療す「應」（再讀）（から）不<sup>す</sup>。（上<sup>370</sup>、・ヤウ・（・  
ヤウニ・）・すだま・たふる・たり・を・）

○應（に）<sup>ヤウ</sup>「水十口十又」諸の衆生類（返）を\*捕フ「應」（再讀）  
（から）不<sup>す</sup>。（上<sup>370</sup>、・とらふ・）

\*「捕」 読点（朱筆）あり。

○\*復（た）次（に）餘外の・宗「ニ」説「カク」十種の法（返）  
「ヲ」具「して」眞言成（するを）得（上<sup>372</sup>、・に・とかく・  
を・）

\*「復」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十六」（共  
に朱筆）とあり。

○爲（<sup>イ</sup>返）「ハ」所（る）行人「ト」・眞言「ト」・伴侶「ト」  
・所成就「ノ」物「ト」・精勤「ト」・處一所「ト」・淨地「ト」  
・時節「ト」・本尊「ト」・財物なり「イ、財物「トナリ」」。（上<sup>372</sup>、  
・いはゆる・と・と・と・の・と・と・と・と・と・と・と・と・と・と・と・  
と・なり・）

○此の十法（返）を具して成就「ヲ」得「ト」言フ。（上<sup>374</sup>、  
を・と・いふ・）

○又(た) 餘宗の説(かく)・三種の法(返)を具(して)眞言乃(ち)成す。(上<sup>374</sup>、・を・)

○謂(返) (は) 所(る) \*眞言「ト」行人「ト」・伴侶なり・(上<sup>375</sup>、・と・と・)

\*「眞」 本行では同字の上に「爲」字を記し、右傍に「イ无シ」と注記(墨筆)する。

○又(た) 餘宗の説(かく) 四種の法(返) 「ヲ」具「して」眞言乃(ち)成(す) (上<sup>375</sup>、・を・)

○謂(る)・處所「ト」・精勤「ト」・時節「ト」・依法なり「イ、依法「トナリ」」。(上<sup>376</sup>、・と・と・と・と・となり・)

○又(た) 餘宗「ノ」説(かく) 五種の法(返) 「ヲ」具「して」眞言乃(ち)成(す)。(上<sup>376</sup>、・の・を・)

○謂(る) 眞言「ト」・所成就の物「ト」・處所「ト」・本尊「ト」・物なり「イ、物「トナリ」」。(上<sup>377</sup>、・と・と・と・と・と・となり・)

○是(返) (の) 如(き) 諸宗\*成(は) \*干法に「イ、十法「ト」説(く)。(上<sup>377</sup>、・と・)

\*「成」 『大藏經』では「或」字とする。

\*「干」 『大藏經』では「十」字とする。

○或(は) 八法「ト」説(き) 或(は) 六或(は) 四或(は) 三或(は) \*三又(た) 本法(返) に於て演説不同なり。(上<sup>378</sup>、・と・)

\*「三」 『大藏經』では「二」字とする。

○然も此の釋教に二種の法(返) 「ヲ」具「して」眞言\*乃(ち)一者行人・二者眞言なり・(上<sup>379</sup>、・を・)

\*「乃」 同字の下に一字あると思われるが、虫損により未詳。同箇所、『大藏經』では「成」字とする。

○爾人「ハ」・具「ニ」戒律・正勤・精進(返) (を) 以(て)「イ、戒律「返」 「を」以「て」正勤精進(し)」他の利養(返)「ニ」於(て) 貪嫉「ヲ」起(さ) 不。(上<sup>380</sup>、・は・つぶさに・に・を・)

○身命財(返) 「ニ」於「て」常「ニ」戀着(返) 无(し) (上<sup>381</sup>、・に・つねに・)

○眞言の文字・圓滿・聲相分明に「シテ」成就(す) 可(き) 法皆(な) 悉(く) 具足「セリ」 (上<sup>381</sup>、・して・・・す・)

グソクす・)・り・)

○佛菩薩の所居(の)「之」\*處「返」に於「て」\*言成\*就(返) (せ) 不(ること) 上(返) (に) 翻(して) 應(に) 知(る)

「應」(再讀) (し)。(上<sup>382</sup>、

\*「處」 「も」のヲコト点らしきもの(墨筆)があるが、未詳。

\*「言」 右傍に「イハ」(朱筆)とあるが、未詳。上欄に「六(言不/下)」(墨筆)とあり。383行と384行の行間に、墨筆にて「眞言不成(三卷/本)十五終有眞字十六始有言字故眞言不成也」と記す。

\*「就」 右傍に「イ无シ」(墨筆)とあり。

○\*復(た) 次(に) 行者・念誦(返) (に) 於て時(に) 中間に闕犯(返) (する) 所有(り) 或(は) 間斷(返) 有(り)「て」本の所誦(返) 「ヲ」\*棄て別に餘の明主(返) 「ヲ」持「シ」 自(ら) \*持(する) 所(の) 者(を) 他人「ニ」授與「セルハ」。念誦「ノ」遍數・滿(返) (つ)「ト」雖(も) 成「セ」 不。(上<sup>384</sup>、・を・を・す・(・ヂす・)・みづから

・に・ー・す・（・ジユヨす・）・り・は・の・と・ー・す・（・ジャウズ・）

\*「復」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十七」（共に朱筆）とあり。

\*「棄」 「本」字の上に補入符（朱筆）あり。右傍に同字を補入（墨筆）。

\*「持」 「は」のヲコト点らしき符号（朱筆）と、右傍に「ノハ」の仮名（墨筆）があるが、共に未詳。

○復（た）更（に）應（に）須（く）毎日三時に法（返）「ノ」如「ク」供養念誦「して」數・十\*方遍を滿（す）「應」（再讀）（し）。「イ、十方遍（に）滿（つれ）「ハ」即（ち）應（に）法（返）（の）如（く）護摩「ス」「應」（再讀）（し）。（上<sup>386</sup>、

・に・の・ごとし・ば・ー・す・（・ゴマす・）

\*「方」 『大藏經』では「萬」字とする。

○當（に）大麥（返）「ヲ」以（て）稻「―」花（返）を用て或（は）巨<sup>コ</sup>勝<sup>マヤコ</sup>ヲ以（て）・或（は）白芥子ノ隨（ひて）其の一（返）「ヲ」取（り）蘇（返）與相（ひ）和「して」數十千・或（は）八七千・或（は）四三千ヲ滿（せ）。（上<sup>387</sup>、・を・コ・（・ゴ・）・こま・こま・を・の・を・を・）

○憂曇鉢羅木・或（は）阿説他木・或（は）波羅餘<sup>シヤ</sup>「上」木・或（は）闍迦木（を）以（て）・或（は）龍木（を）以（て）・或（は）无憂木 或（は）密魯婆（上）木 或（は）俱陀木・或（は）唵（平）沒（上）羅木 或（は）却（去）陀羅木・或（は）\*餘彌<sup>ミ</sup>「上」木・或（は）鉢落木<sup>ヲ</sup>・或（は）阿波末伽木・或（は）\*未度<sup>マ</sup>「上」迦木・或（は）湛<sup>ダ</sup>□□木（を）用て・

隨（ひて）「ノ」木（返）「ヲ」取（り）龜細「は」指<sup>ハカリ</sup>如「イ、指（の）如（く）「セヨ」」（上<sup>389</sup>、・ー・シヤ・（・ハラシヤモク・）・ー・マ・ー・（・オムモツラモク・）・ー・ミ・ー・（・シヤミモク・）・ー・ラ・ー・（・ハチラクモク・）・ー・マ・ー・（・アハマツギヤモク・）・マ・ー・ー・（・ミドキヤモク・）・タ・ー・の・を・ばかり・す・）

\*「除」 本行では「彌木」字の下にあった文字を、墨筆にて上に移動。

\*「未」 『大藏經』では「未」字とする。

○長「ハ」十指「ニ」・截（ち）て「イ、截（つ）。「」」「於」蘇密酪（に）・柴の兩の頭（返）を<sup>ヲ</sup>「手十日十皿<sup>サ</sup>」イテ毎日に護摩「セヨ」（上<sup>394</sup>、・は・に・を・さく・て・ー・す・（・ゴマす・））

○數・上「ニ」説（く）「カ」如（し）。（上<sup>394</sup>、・に・が・）  
○前「ニ」闕\*犯（せは）還「て」清淨（を）得。（上<sup>395</sup>、・に・）

\*「犯」 返点らしき点（朱筆）があるが未詳、『大藏經』によれば「闕」字の上に「所」字の脱漏か。

○然（る）後「ニ」方「ニ」眞\*言の悉地を求「メヨ」。（上<sup>395</sup>、・に・まさに・もとむ・）

\*「言」 補入符にて右傍に補入（墨筆）。

○\*復（た）次（に）行者・所持「ノ」眞言「ヲ」・餘「ノ」持誦繫縛の明主を「イ、明主「ヲ」持誦繫「―」縛「シ」・或<sup>ルイ</sup>若ハ釘もて打「チ」・或（は）斷「シ」或（は）破「して」成就（せ）不（ら）令（む）。（上<sup>397</sup>、・の・を・の・を・ー・す・（・ケバクす・）・あるいは・うつ・ー・す・（・ダンす・））

\*「復」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十九」（朱筆）とあり。

○即（ち）須（く）應（に）本尊の形像（返）「ヲ」作す「應」（再讀）（し）（上<sup>398</sup>、・を・）

○然して後「ニ」・繼（去）利（上）・吉（上）羅（上）等の諸部の明主・大威「ノ」眞言（返）「ヲ」以（て）蘇密を誦持「して」本尊を灌浴せよ。（上<sup>399</sup>、・に・の・を・）

○是（の）如（く）十日「セヨ」（上<sup>400</sup>、・す・）

○此「ノ」法（返）「ヲ」作「リ」已（り）「ナ」は餘の所縛（返）を被（り）即（ち）解脱（を）得。（上<sup>401</sup>、・この・を・つくる・ぬ・）

○\*復（た）次（に）行者・眞言（の）中（返）（に）於（て）制（返）（する）所（の）諸の法「イ、眞言「ノ」中「ノ」所制「ノ」諸（の）法「返」「ニ」於（て）」竝「ニ」皆（な）修行「セヨ」（上<sup>402</sup>、・の・の・の・に・ならびに・・・す・）シユギヤウす・）

\*「復」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「五十八」（共に朱筆）とあり。

○一（つ）ヲモ遺闕（する）「コト」无レ。（上<sup>402</sup>、・を・も・こと・なかれ・）

○仍「ホ」成（返）「セ」不（れ）者即（ち）應（に）諸の猛毒（返）を以「て」彼の尊形（返）を作（り）テ繼喇吉羅等の諸部の明主の眞言もて其（の）像形（返）を截（ち）て段段に（返）行（返）を「イ、行（を）」「イ、行「ハント」」爲（シ）「シテ」白芥子油（返）に和して毎日三時に「而」護摩「ヲ」作「レ」。（上

403、・なほ・・す・（・ジャウズ・）・ば・て・だんだんに・コン・ヘン・おこなふ・む・と・なす・て・を・つくる・）

○是（返）（の）如（く）七日セハ即（ち）悉地（を）得。（上<sup>405</sup>、・す・ば・）

○是「ノ」故「ニ」諸法は・皆（な）心（返）（に）從（り）生（す）（上<sup>406</sup>、・この・に・）

○无自縁「ニ」非（す）。（上<sup>407</sup>、・に・）

○亦（た）我（返）「ニ」從（り）「て」能「く」諸法を生（する）「ニ」不「ス」。（上<sup>408</sup>、・に・に・あらず・）

○但（た）无明（返）「ニ」由（り）生死に流轉す。（上<sup>408</sup>、・に・）

○四大和「一」合「して」名（返）を假（り）て「イ、假「ニ」名（け）「テ」色ト爲す。（上<sup>409</sup>、・かる・かりに・て・と・）

○是（返）（の）如（き）四蘊「モ」・應（に）知（返）（る）「應」（再讀）（し）是（れ）空なり。（上<sup>410</sup>、・も・）

○由「ホ」聚沫（入）の如（し）。（上<sup>411</sup>、・なほ・・マツ・（・ズマツ・））

○受（は）浮泡ノ如（し）。（上<sup>411</sup>、・・ハウ・（・ブヘウ・）の・）

○\*復（た）次（に）念誦の・數足り・悉地（近）カム（と）欲（れ）は即（ち）\*推—夢の中に是（返）（の）如（き）事

「ヲ」見（る）。（上<sup>414</sup>、・たる・ちかづく・む・を・）

\*「復」 同字の上に丸印（朱筆）あり。右傍・上欄に「六十七」（共に朱筆）とあり。

\*「推」 右傍に「□□□□」（朱筆）とあり。



○或(は) 師子大虫・及(ひ)馬(返)に騎リ 大高山(返)「ニ」昇(り) 虚空「ノ」中(返)「ニ」於(て)大(な)ル雷の聲(返)「ヲ」聞キ(上<sup>415</sup>、・のる・に・の・に・おほきなり・を・きく・)

○或(は) 犀牛・白象・特牛(返) (に) 騎(り) (上<sup>417</sup>、サイ・・・サイグ・)

○或(は) 錢財・花鬘・及(ひ)衣(返)を得(上<sup>417</sup>、・う・)  
○或(は) 酒穴水類(の)「之」果(返)「ヲ」\*得(上<sup>418</sup>、・を・)

\*「得」 「せ」のヲコト点らしき符号(朱筆)があるが、未詳。

○或(は) 紅蓮花經・及(ひ)尊容(返)を得(上<sup>418</sup>、・う・)

○或(は) 駱駝\*駝・并|與(に)犢子(返) (を)得(上<sup>419</sup>、・ラク・)

\*「駝」 右傍仮名「ラク」は底本のまま。

○或(は) 滿載(の)「之」車・□\*線・□拂ヲ獲(上<sup>419</sup>、・はへはらひ・を・)

\*「線」 「II」(土+泉)字を重書にて訂す(墨筆)。

○\*鳥「イ、鳥」履(返) (を)\*獲(上<sup>420</sup>、・セキリ・・シヤクリ・・はきもの・)

\*「鳥」 419行上欄に「鳥(思積/反)」(墨筆)とあり。

\*「護」 同字の上に一字あると思われるが、虫損により未詳。『大蔵經』では「竝」字とする。

○或(は) 横刃孔雀の尾扇(去)・金□寶珠螺貝・復(去)却(上<sup>420</sup>、・リ□キヤ・・リカク・)

\*「女」 右傍に仮名(朱筆)があると思われるが、虫損により未詳。

○或(は) 己カ母(返)を見(上<sup>422</sup>、・が・)

○或(は) 諸寶の嚴身の「之」具(返)を得及(ひ)臥具の覆(ふ)ニ白衣(返)「ヲ」以(する)を得(上<sup>422</sup>、・に・を・)

○或(は) 自身・大海(返)に「イ、大海「ヲ」汎ヒ過キ「イ、汎過「シ」及(ひ)江河・龍池・\*池陂泊(返)を渡リ及|以(ひ)飲\*浴(返)スレ(を)見(上<sup>423</sup>、・を・うかぶ・すぐ・ホム・す・・ホムクワす・・ヒ・・ヒバク・)・わたる・・す・・オムヨクす・)

\*「池」 同字左傍に二本線(墨筆)あり。前字と重複する為の見せ消ち符号か。また斜線(朱筆)もあるが、未詳。

\*「浴」 右傍仮名は底本のまま。

○或(は) 血(返)「ヲ」以(て)自身(返)を澡浴すと見(上<sup>424</sup>、・を・)

○或(は) 入寺・制底・僧房(返)を「イ、寺制底僧房「ニ」入(ると)見(上<sup>424</sup>、・に・)

○或(は) 大力ノ阿修羅衆・淨婆羅門(返)を見(上<sup>427</sup>、・の・)

○或(は) 意樂の丈夫・及|以(ひ)女人・富\*貴(入輕)\*端|直(入)善心ノ長者(返) (を)見(上<sup>427</sup>、・チヨク・・タンヂキ・・の・)

\*「貴」 右傍に仮名(墨筆)があると思われるが、虫損により未詳。

\*「端」 本行「故」字。右傍に「端」字(墨筆)を記す。

○或(は) 父・母・及|以(ひ)親眷・一處(返)に相(ひ)|會(する)ヲ見(上<sup>428</sup>、・を・)

○或(は) 持明主の諸仙・妙持誦の人(返)ヲ見(上<sup>429</sup>、・を・)

○或(は) 日月(返) 「ヲ」吞(み) 納ルト見(上<sup>430</sup>、・を・の  
む・いる・と・)

○或(は) 自(ら)「於」屎「ノ」坑(返)に墮(つると)見(上<sup>430</sup>、  
・の・)

○或(は) 人ノ精(返) (を) 飲(み) 及(ひ) 人ノ肉(返)を  
\*契ヒ「於」火聚(返)に入(る)ト(上<sup>430</sup>、・の・の・くらふ  
・と・)

\*「契」『大藏經』では「喫」字とする。

○或(は) 女人・「於」身の内(返)ニ入(る)ト見(る)(上<sup>431</sup>、  
・に・と・)

○是(返) (の) 如(き)等の殊勝の夢ニ見已(らは)應(に)  
知(返) (る)「應」(再讀) (し)一月及「已(ひ)半月に當  
(に)成就を獲「當」(再讀) (つ)。(上<sup>431</sup>、・ゆめ・に・)

おわりに

以上が、高山寺藏『蘇磨呼童子請問經』上巻の仮名加點箇所  
を対象とした訓読文用例集となっている。これは、先に公開し  
た『大乘本生心地觀經』に続くもので、松本氏が提唱する電子  
データ提供の試みの一環と考えている。

漢語の用語掲出の仕方については、前稿同様に呉音統一とい  
う方法をとった。

注 1 大久保綾子「訓点資料語彙の電子データ提供に向けての

実践的試み―宮内庁書陵部藏『大乘本生心地觀經』巻第八  
院政期点仮名点箇所訓読文用例集―(「広島大学日本語史  
研究論集 Issue 1」 平成27・3)

2 松本光隆「訓点資料語彙の文脈つき電子データ提供の一  
試案―高山寺藏不空三藏表制集院政期点巻第一仮名点箇所  
訓読文用例集(稿)―」(高山寺典籍文書綜合調査団研  
究報告論集 平成25・3)

その他参考文献

三崎良周・林慶仁校註 新国訳大藏經『蘇悉地經・蘇婆呼童子  
經・十一面神呪心經』(大藏出版株式会社 平成14・3)

「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース2015版」(<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php>)

松本光隆「蘇磨呼童子請問經における注釈と訓読」(『日本学  
・敦煌学・漢文訓読の新展開』 汲古書院 平成17・5)

付記

本用例集は、松本光隆広島大学教授が昭和六十一年に書  
写・移点した移点本を借用し、底本としたものである。